下横屋遺跡

—山梨県韮崎市下横屋遺跡発掘調査報告書—

1991

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会

下横屋遺跡

— 山梨県韮崎市下横屋遺跡発掘調査報告書 —

1991

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会

序

本書は、韮崎市藤井町北下条地内における平成元年度雇用促進住宅建設予定地の造成工事に伴い、発掘調査された下横屋遺跡の報告であります。

遺跡の所在する藤井町は山梨県有数の穀倉地帯であり、塩川右岸に形成された水田地帯は通称藤井平と呼ばれ、古くは「藤井五千石」とも言われました。古来この肥沃な土地を背景に、数多くの我々の祖先が生活を営んできたことは、最近の圃場整備事業等に伴う発掘調査によって次第に明らかにされつつあります。このような中、今回の下横屋遺跡発掘調査によって弥生時代の集落の一部が確認されたことは、地域の歴史を解明する上で意義あるものであり、貴重な発見と言うことができます。この遺跡を文化財として永く後世に伝えていくことを重要な責務と痛感致します。本書を通して、先人の生活文化の一端に触れていただければ幸です。

最後に、今回の調査並びに報告書作成に当たり、多大なる御理解と御協力を頂いた皆様に、深甚なる感謝を申し上げます。

平成3年2月28日

韮崎市教育委員会

教育長　功刀幸丸

韮崎市遺跡調査会

会長　内藤　登

例　　言

1　本書は、韮崎市藤井町北下条字下横屋地内に所在した下横屋遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、韮崎市土地開発公社の依頼を受け韮崎市教育委員会が実施し、整理作業は市土地開発公社の委託により韮崎市遺跡調査会が行った。

3　整理作業及び報告書の作成に関わる業務は、山下孝司が総括を担当した。参加協力者は以下のとおりである。

小田切絹江・岡本保枝・小沢治代・小沢栄子・志村冴子・長島昌子・小沢千代子・小沢久江・小沢みやの・小沢高恵・深沢真知子・石原ひろみ・三井福江・功刀まゆみ・小野初美

4　竪穴住居址出土炭化材の同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

5　凡　　例

①　挿図中のドットは焼土をあらわす。

②　挿図断面図の は石をあらわす。

③　縮尺は各挿図ごとに示した。

④　遺構断面図の水糸標高（m）は数字で示した。

⑤　写真図版中遺物に付けられた番号は、実測図の番号と対応する。

⑥　住居址番号は、発掘調査の現場に於て付けたものである。

6　発掘調査、遺物整理及び報告書作成に際して、多くの方々諸機関より御指導・御協力を賜わった。一々御芳名を上げることは避けるが、厚く御礼を申し上げる次第である。

調　査　組　織

1　調査主体　　韮崎市教育委員会

2　調査担当　　山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）

3　調査参加者

岡本嘉一・岡本保枝・小沢千代子・小沢治代・小沢宮野・小田切絹枝・志村冴子・長島昌子・小沢栄子・坂本恒子・五味ゆき子・細田みずほ・岩下登志子・神取ツギ子・大柴みや子・仲田鈴子・水上幸枝・小川けさじ・金丸よし子・伊藤恵子・大柴恒子・小林銀子・仲田竹子

4　事 務 局　　韮崎市教育委員会社会教育課

教育長　功刀幸丸　　課長　成島主計（前任者）・中島尚武　　課長補佐　真壁静夫

係長　雨宮勝己（前任者）・横森淳彦　　野沢可祝（前任者）・雨宮智子

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図・表目次
写真図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯と概要 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地環境と周辺の遺跡 …… 1

1　遺跡の立地 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 1

Ⅲ　遺跡の地相概観 …… 3

Ⅳ　遺構と遺物 …… 5

1　弥生時代の遺構と遺物 …… 5
2　平安時代以降の遺構と遺物 …… 24

Ⅴ　下横屋遺跡の炭化材樹種同定 …… 27

Ⅵ　ま　と　め …… 32

写真図版

挿　図・表目次

第1図　下横屋遺跡①と周辺の遺跡 …… 2
第2図　下横屋遺跡位置図 …… 3
第3図　下横屋遺跡全体図 …… 4
第4図　1号住居址平・断面図 …… 5
第5図　1号住居址出土遺物 …… 6
第6図　2号住居址平・断面図 …… 8
第7図　3号住居址遺物出土状態 …… 9
第8図　3号住居址平・断面図 …… 10
第9図　3号住居址出土遺物 …… 11
第10図　3号住居址出土遺物 …… 12
第11図　4号住居址平・断面図 …… 13
第12図　4号住居址出土遺物 …… 14
第13図　5号住居址遺物出土状態、平・断面図 …… 15
第14図　5号住居址出土遺物 …… 16
第15図　5号住居址出土遺物 …… 17
第16図　6号住居址平・断面図 …… 18
第17図　6号住居址出土遺物 …… 19
第18図　7号住居址平・断面図 …… 21
第19図　7号住居址出土遺物 …… 21
第20図　10号住居址平・断面図 …… 22
第21図　10号住居址出土遺物 …… 23
第22図　8号・9号住居址平・断面図 …… 24
第23図　9号住居址出土遺物 …… 25
第24図　その他の遺物 …… 26
第25図　住居址出土炭化材試料位置図 …… 31
第26図　下横屋遺跡調査区域 …… 33
図1　木材組織（クヌギ節の模式図） …… 27
表1　住居址出土炭化材のタイプとその樹種 …… 29

写 真 図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・１号住居址及び出土遺物

図版２　２号住居址・３号住居址及び出土遺物

図版３　発掘風景・３号住居址及び出土遺物

図版４　４号住居址・５号住居址

図版５　５号住居址出土遺物

図版６　６号住居址及び出土遺物・７号住居址及び出土遺物

図版７　10号住居址及び出土遺物・遺跡風景

図版８　８号住居址・９号住居址・集石・その他の遺物・発掘調査参加者

図版９　下横屋遺跡の出土炭化材の電子顕微鏡写真

図版10　下横屋遺跡の出土炭化材の電子顕微鏡写真

Ⅰ　調査に至る経緯と概要

平成元年10月５日付けで、韮崎市土地開発公社から宅地造成工事にともない、遺跡の有無及び範囲確認の調査依頼が韮崎市教育委員会に出された。市教育委員会では10月15日に試掘調査を行い遺跡の存在を確認した。調査結果をもとに、市教育委員会と市土地開発公社で協議した結果、文化財保護法に基づき工事着手前に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成元年11月７日から開始し、途中11月21日～28日までの間中断し、12月20日に現場調査を終了した。整理作業は平成２年度に行い、報告書作成までの作業が完了したのは、平成３年２月28日であった。

Ⅱ　遺跡の立地環境と周辺の遺跡

１　遺跡の立地（第１・２図）

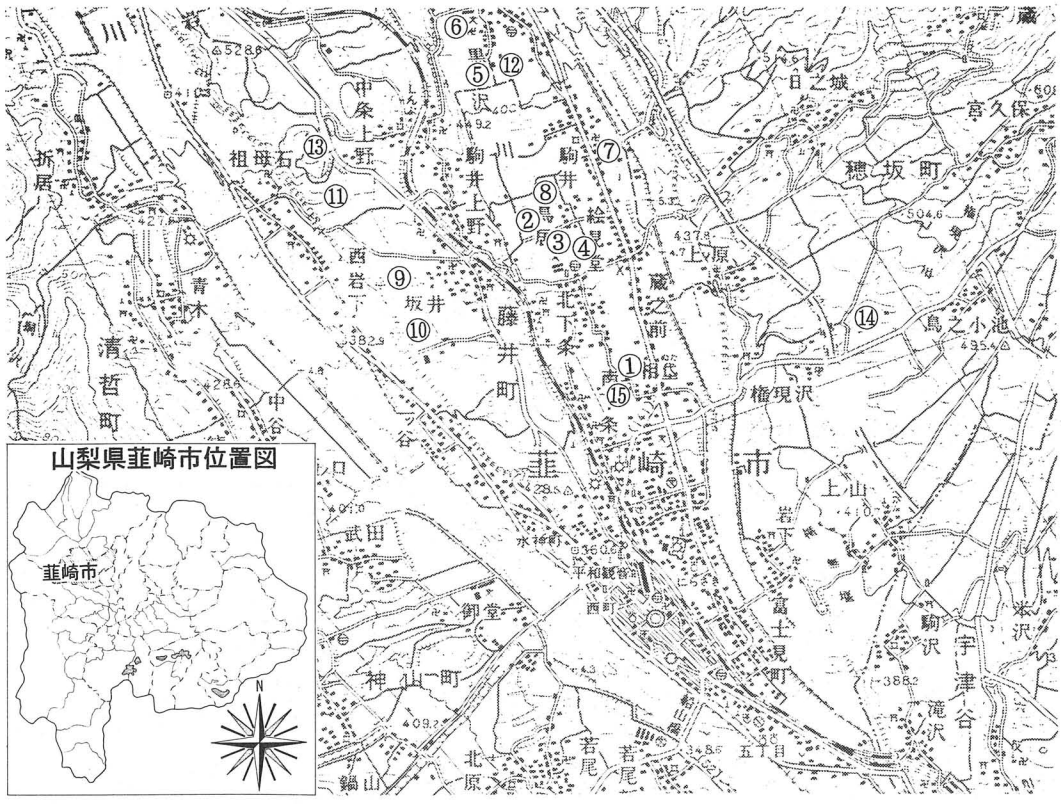
下横屋遺跡は、山梨県韮崎市藤井町北下条字下横屋地内に所在した。調査面積は約 1,300㎡。

韮崎市は山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的に山・台地・平地の３地域に大別される。塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ケ岳山麓西端の断崖と。七里岩台地の東側の片山とにはさまれた低地性平地で、通称「藤井平」と呼ばれ、地内を南東流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯となっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、韮崎等ノ数村ヲ里人藤井ノ圧五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地域は平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、度重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、下横屋遺跡は標高約370ｍの水田下に発見された。

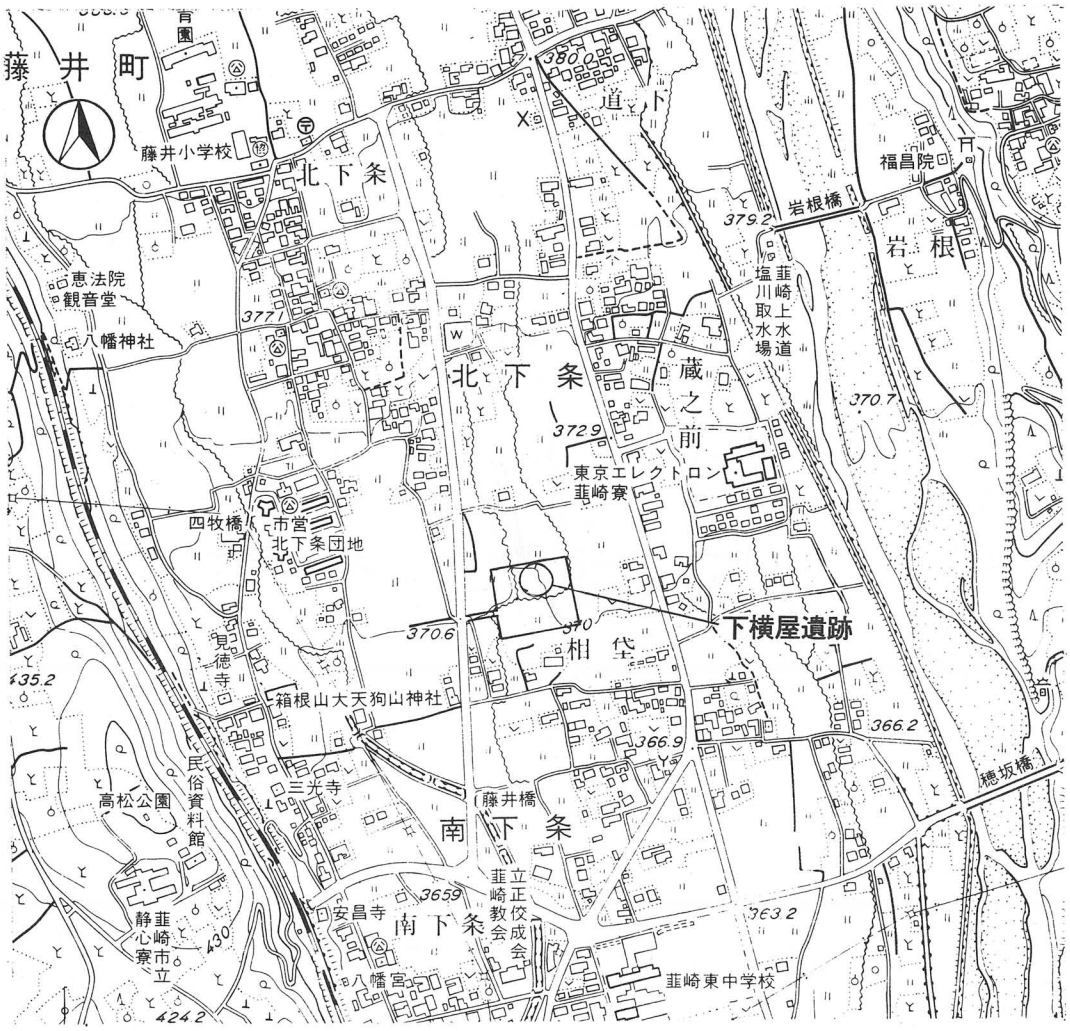
２　周辺の遺跡（第１図）

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	下横屋	弥生・平安	
②	北後田	縄文・平安	平成元年度 韮崎市教育委員会調査
③	後田	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	昭和63年度 韮崎市教育委員会調査
④	堂の前	弥生・奈良・平安	昭和61年度 韮崎市教育委員会調査
⑤	金山	中世～近世	昭和60年度 韮崎市教育委員会調査

番号	遺跡名	時代区分	備考
⑥	中田小学校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 韮崎市教育委員会調査
⑦	駒井	平安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
⑧	宮ノ前	縄文・弥生・奈良・平安	平成元年～平成2年 韮崎市遺跡調査会調査
⑨	坂井	縄文前期～晩期	志村 滝蔵『坂井』 地方書院 昭和40年
⑩	坂井南	古墳前期・平安	昭和60年度 韮崎市教育委員会第三次調査
⑪	天神前	縄文	
⑫	前田	平安	昭和62年度 韮崎市教育委員会調査
⑬	新府城跡	中世	国指定史跡
⑭	女夫石	縄文	
⑮	北下条	弥生～平安	昭和57年度 韮崎市教育委員会調査



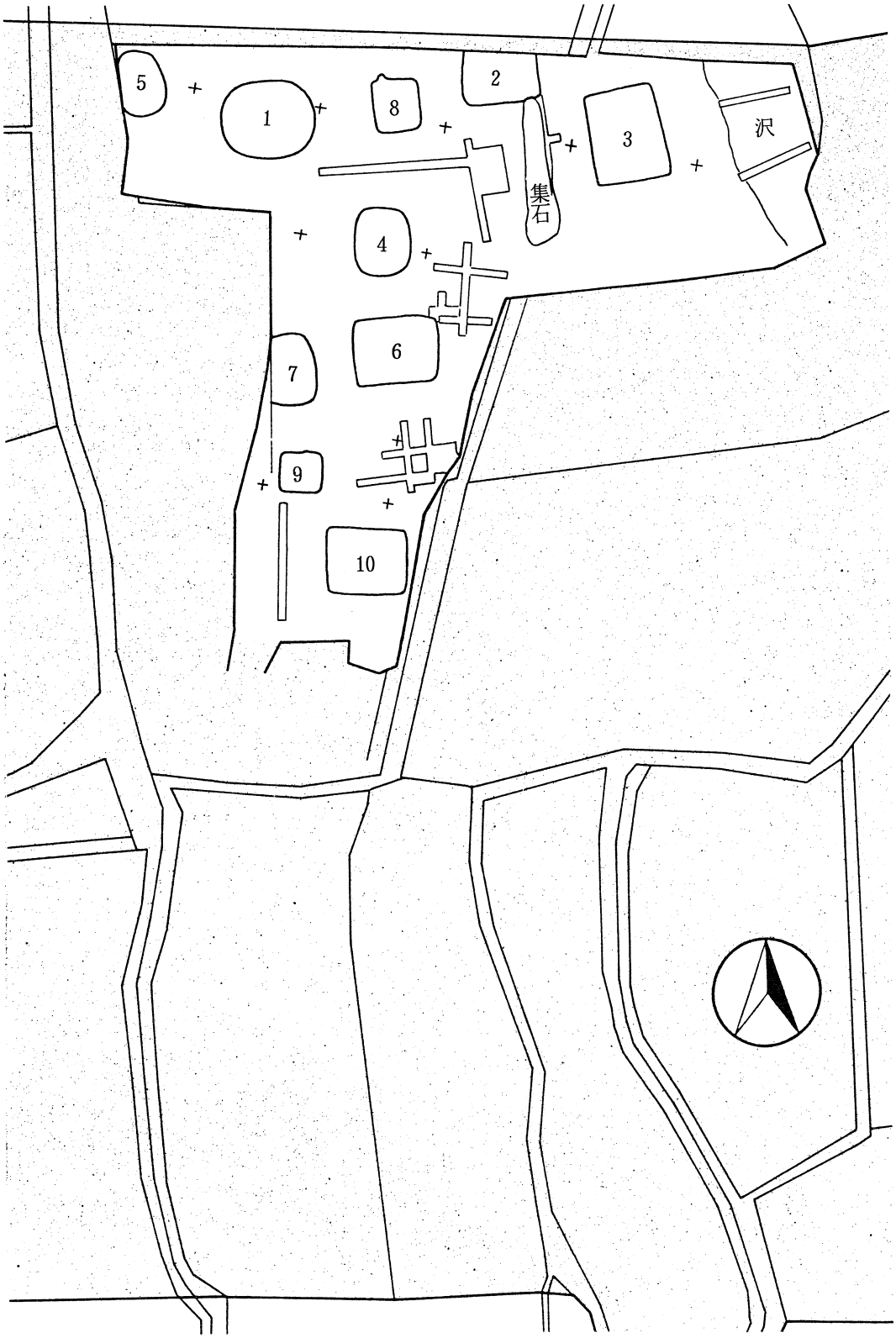
第1図　下横屋遺跡①と周辺の遺跡　（1：50,000）



第２図　下横屋遺跡位置図　（１：10,000）

Ⅲ　遺跡の地相概観

下横屋遺跡は、市営北下条団地から東へ約300ｍの所に位置し、日当りのよい舌状に張り出した微高地の先端部分を発掘調査した。遺跡の南東方には相垈の集落があり、北西には北下条の集落が広がっている。東側は水路があり、調査によりかつては大きな沢があったことが窺える。西側にも大きな沢があり、さらにその西側には弥生～平安時代の北下条遺跡が存在している。南側は一段低くなり、湿田が形成されている。北側も水田であり、下横屋遺跡は北方にのびていると思われる。調査区域の土層は、耕作土・水田床土下に暗褐色系土・暗黄褐色糸土・黄褐色系土が面的に散在しており、やや複雑な堆積が窺えるが、遺構の確認は比較的容易であった。遺構確認面は、暗黄褐色系土を中心にとらえた。なお、遺構の掘り込まれた土層は、砂層の上にのっており、１ｍ以上掘り下げると砂となる。



第３図　下横屋遺跡全体図　（１／500）

Ⅳ　遺構と遺物

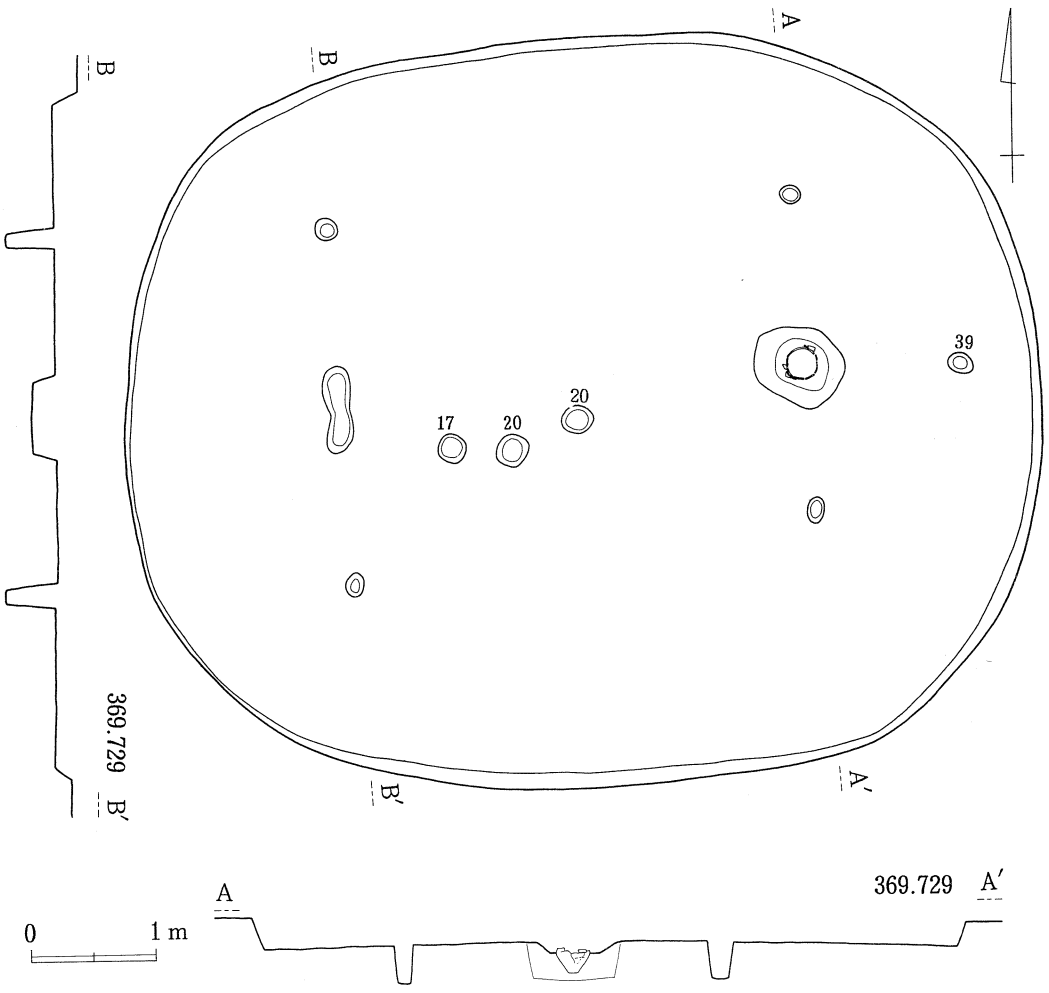
発掘調査の結果、弥生時代の竪穴住居址８軒、平安時代の竪穴住居址２軒が検出され、他に集石が確認された（第３図）。以下、時代別に遺構と遺物について記す。

１　弥生時代の遺構と遺物

＜１号住居址＞　（第４・５図）

〔遺　構〕

調査区域北辺西寄りに位置する。暗黄褐色系土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は長軸約７ｍ35㎝、短軸約６ｍで、平面形は小判形を呈する。壁はやや外傾しながら立ち上がり、高さは15～25㎝前後を測る。床面は略平坦。柱穴は４本主柱穴で、長方形に配されている。柱穴



第４図　１号住居址平・断面図　（１／60）

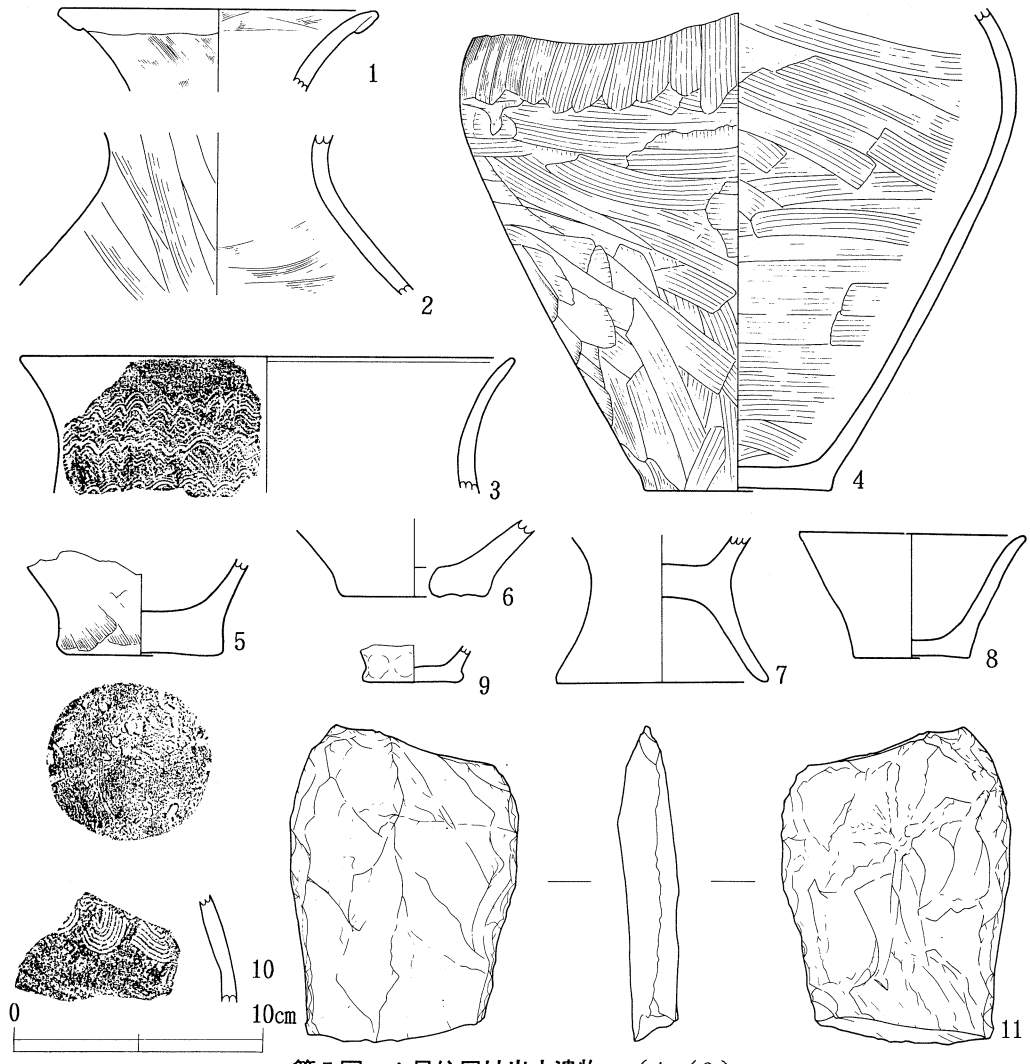
の床面からの深さは、東側２本が約30㎝、西側２本が約40㎝を測る。また別に東壁中央に近い所に、床面からの深さ39㎝の小穴がある。炉は、東側２本の柱穴間を結ぶ線上の中央部分にあり、甕形土器の胴部下半を埋設してつくられている。他に内部施設としては、床面中央西側に小穴が３つあり、西側２本の柱穴の間に８の字状の穴が検出された。

〔遺　物〕

大型の住居址ではあるが、出土した遺物は少ない。

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	壷	－，12.9，－	密、白色粒子を含む	内面－にぶい黄橙系　外面－にぶい橙系
		折り返し口縁　内面－斜縦刷毛目がみられる　外面－口縁部横刷毛撫で　口縁部破片		



第５図　１号住居址出土遺物　（１／３）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
2	壷	－，　－，　－	密、黒・白色粒子を含む	内・外面－にぶい黄橙色系
		内面－横刷毛撫で　外面－斜縦刷毛撫で		頸部破片
3	甕	－，10.0，　－	やや粗い、金雲母・砂粒を含む	内面－にぶい橙色系　外面－浅黄橙色系
		内面－横撫で　外面－櫛描波状文		口縁部破片
4	甕	－，　－，　－	密、黒・白色粒子を含む	内面－にぶい黄橙色系　外面－灰黄褐色系
		内・外面－刷毛整形	炉体土器	胴部下半
5	甕	－，　－，　6.7	やや粗い、砂粒を含む	内面－浅黄橙色系　外面－にぶい褐色系
		外面－胴下部ヘラ撫で、底部籾痕あり		底部破片
6	甑	－，　－，　6.0	やや粗い、砂粒を含む	内面－にぶい橙色系　外面－橙色系
		内面－刷毛目痕がみられる　外面－磨き(？)底部に単孔があく		底部破片
7	台付甕	－，　－，　8.5	密、細い砂粒を含む	内面－にぶい褐色系　外面－にぶい橙色系
		内面－横撫で　外面－縦磨き(？)		脚台部破片
8	鉢	5.0，　9.1，　4.7	やや粗い、金雲母・砂粒を含む	内面－にぶい褐色系　外面－にぶい橙色系
		撫で・磨きにより仕上げられる		完形
9	手捏土器	－，　－，　4.1	やや粗い、砂粒を含む	内・外面－にぶい橙色系
		外面－指頭圧痕がみられる		底部破片
10	甕	－，　－，　－	やや粗い、砂粒を含む	内・外面－にぶい橙色系
		外面－櫛描模様あり		破片
11	石器			

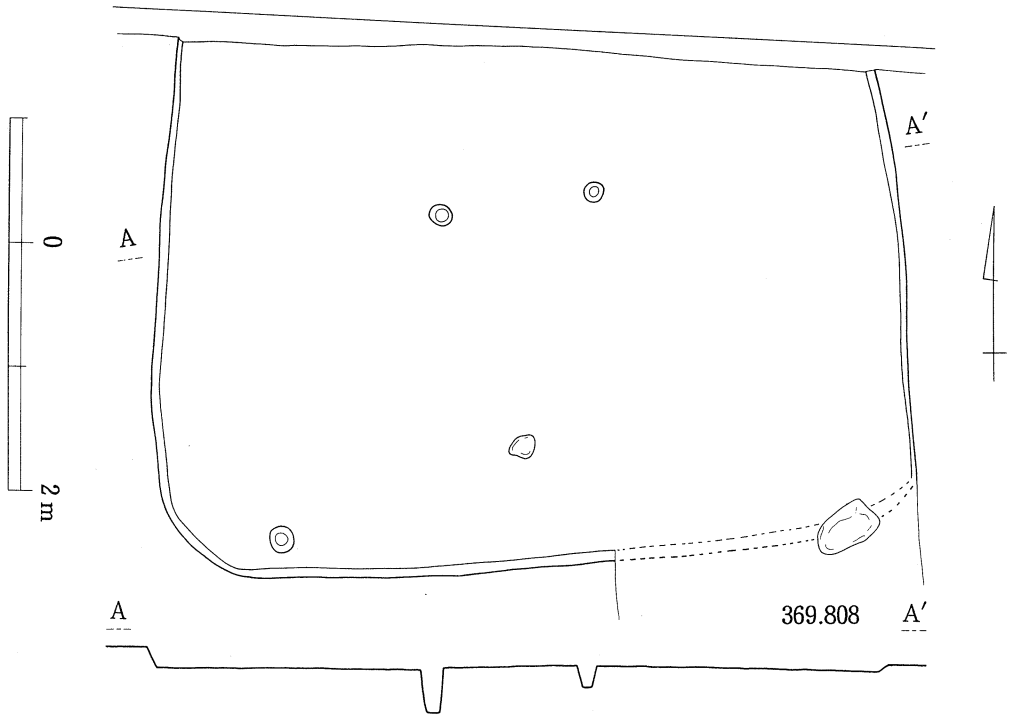
＜2号住居址＞　（第6図）

〔遺　構〕

調査区域北端に位置する。耕作等によるものか削平が著しく、浅い竪穴となっている。北側は調査区域外のため完掘できなかった。規模は東西約6mを測る。平面形は隅円長方形を呈すると思われるが不詳。壁は東側から南側にかけては不明瞭であるが、高さは5～17cm前後を測る。床面は略平坦。中央に小穴が2カ所あるが、不揃いである。南西隅に粘土の詰まった小穴があった。炉は検出した内部には見られなかった。

〔遺　物〕

弥生時代と思われる土器の小片が僅かに出土したにすぎない。



第６図　２号住居址平・断面図　（１／60）

＜３号住居址＞　（第７・８・９・10図）

〔遺　構〕

調査区域北辺東寄りに位置する。黄褐色系土中に炭化物の混入した暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は南北約７ｍ50㎝、南辺約５ｍ90㎝、北辺約５ｍ20㎝を測り、平面形は不整の長方形を呈する。床面は略平坦。削平により浅い竪穴となっており、壁高は10～20㎝前後を測る。柱穴は４本主柱穴で、長方形に配されており、床面からの深さ約33㎝となっている。住居内中央に浅い窪みが10個検出されている。炉は北側２本の柱穴を結ぶ線上の中央よりもやや北西側にあり、南に11㎝×32㎝×９㎝の平石を置き、北に甕形土器の胴部下半を埋設してつくられていた。また南側２本の柱穴を結ぶ線上の中央南側には、炉と対になるかのように土器が埋めてあった。

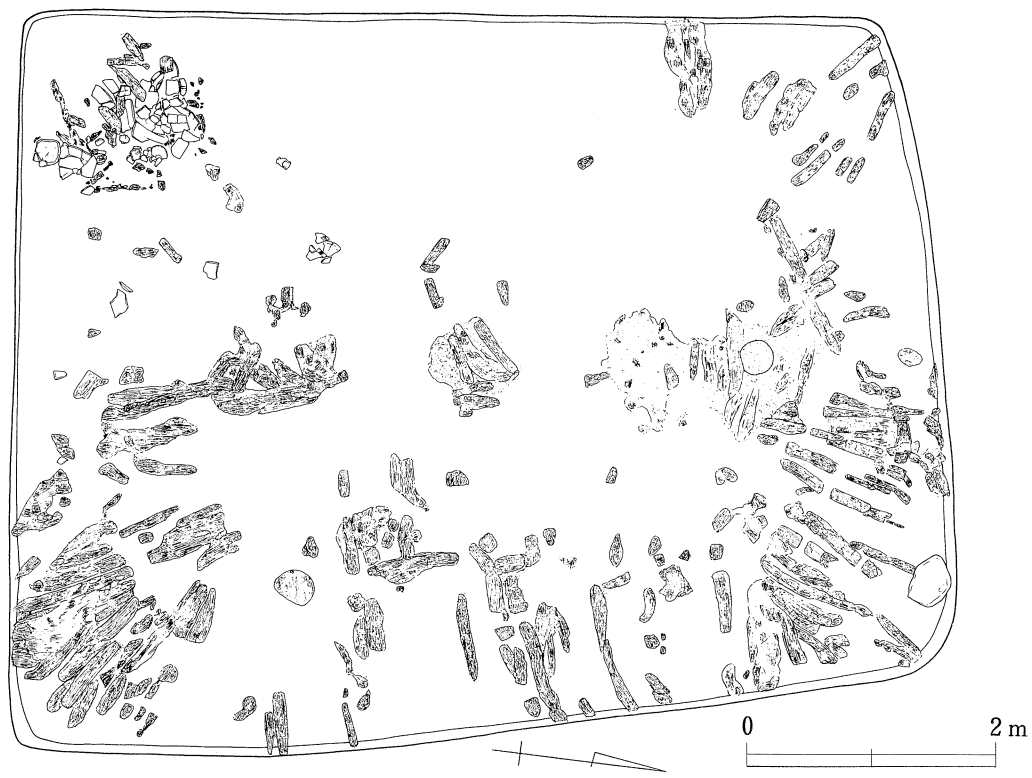
〔遺　物〕

炭化材は、丸太材乃至角材と思われるもので、四方の壁から中心に向かうように検出された。火災により廃絶されたのであろう。南東隅の床面直上に土器が集中していた。

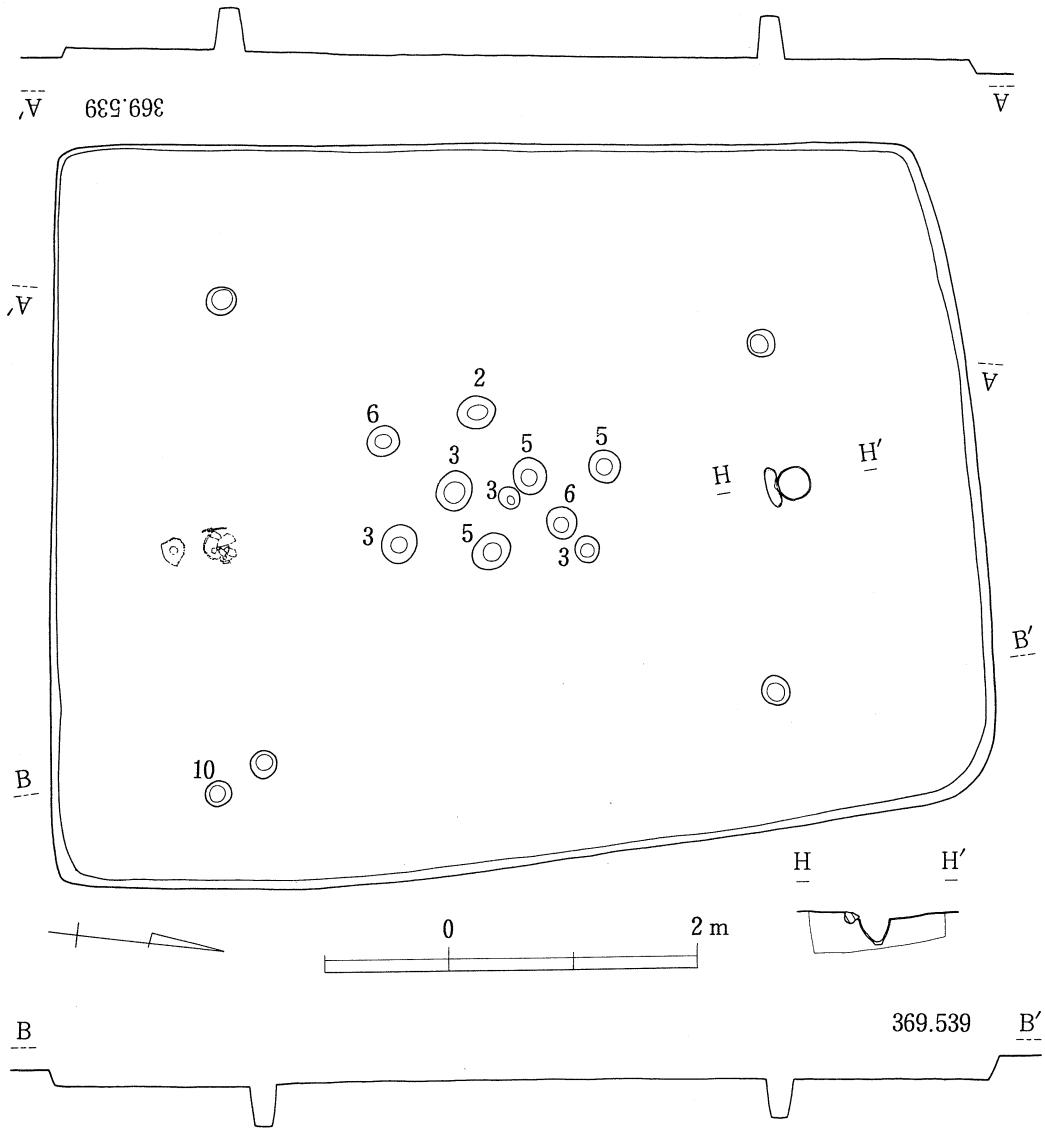
出土遺物一覧　（単位　㎝）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	壷	62.0，25.0，13.5	砂粒・黒色粒子を含む	明褐灰色
		外面は比較的粗い刷毛目整形の後、撫で乃至粗い磨きが施される。内面は刷毛整形の後磨き。複合口縁外側には、３本１単位の棒状浮文が６～８カ所に付けられていたと思われる。		

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
2	壷	－，26.5，－	黒・白・赤色粒子を含む	内面－白灰褐色　外面－淡黄褐色
		口縁部に櫛描波状文があり、頸部に平行線文とそれに直行する単線文が施される。		口縁部破片
3	壷	－，20.2，－	赤・白色粒子、金雲母を含む	内面－淡黄褐色　外面－淡灰茶褐色
		器面に刷毛目痕がみられる。 口縁部外側に4本1単位の棒状浮文が4単位付けられる。		口縁部破片
4	甕	－，15.2，－	金雲母、赤・白色粒子、砂粒を含む	茶褐色
		外面－口縁部～頸部下にかけ、櫛描波状文 - 簾状文 - 波状文の順で施文。		底部欠損
5	甕	－，－，7.0	白・黒色粒子、砂粒を含む	内面－暗灰褐色　外面－淡橙灰褐色
		内外面とも比較的丁寧な磨きにより仕上げられているが、磨滅によりザラついている。		体部下半～底部破片
6	甕	－，－，7.6	白色粒子、砂粒を含む	にぶい褐色
		刷毛整形	炉体土器	口縁部欠損
7	甕	－，－，6.5	黒・白・赤色粒子、砂粒を多量に含む	赤茶褐色
		内面－磨き　外面－撫で		体部下半～底部破片

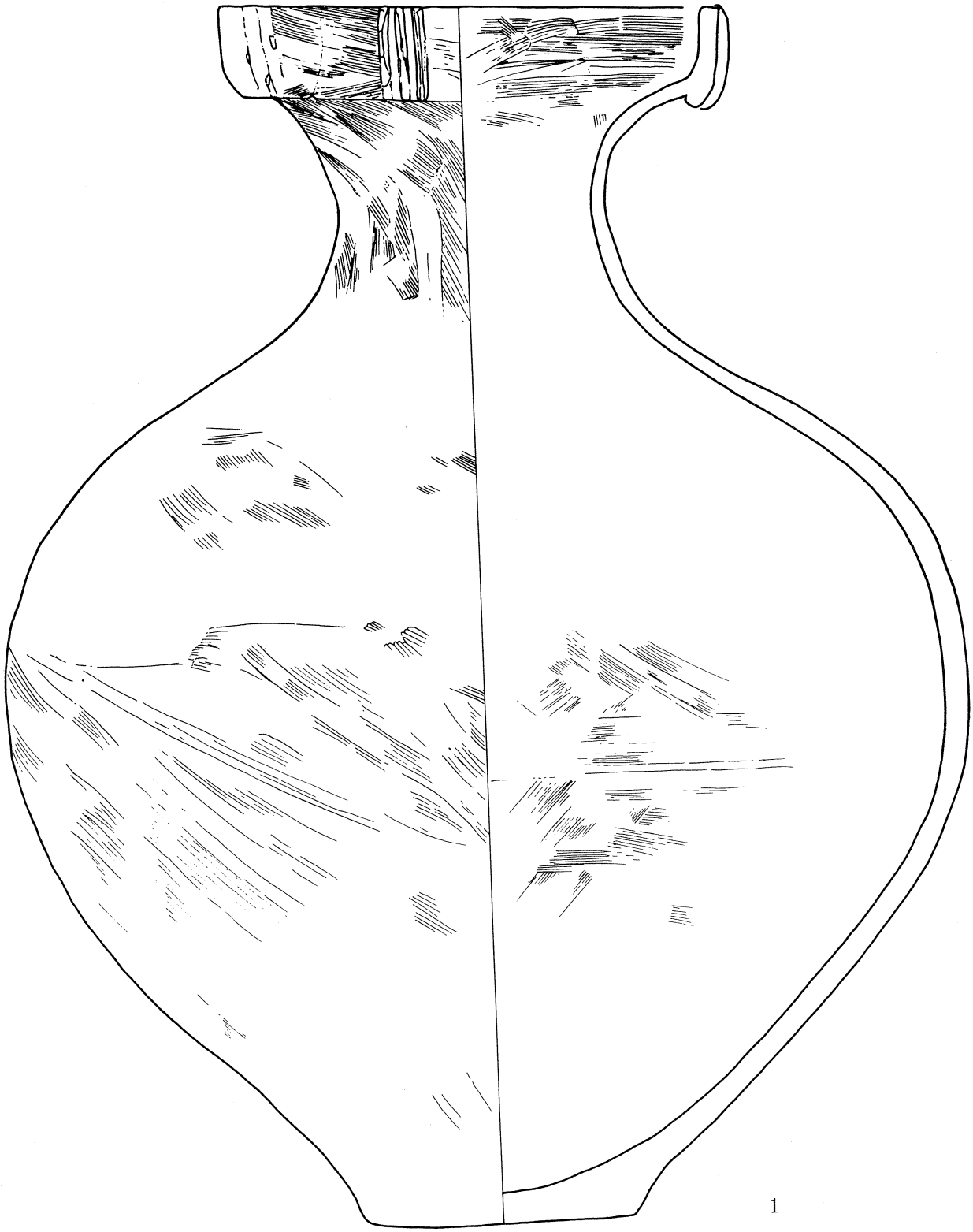


第7図　3号住居址遺物出土状態　（1／60）



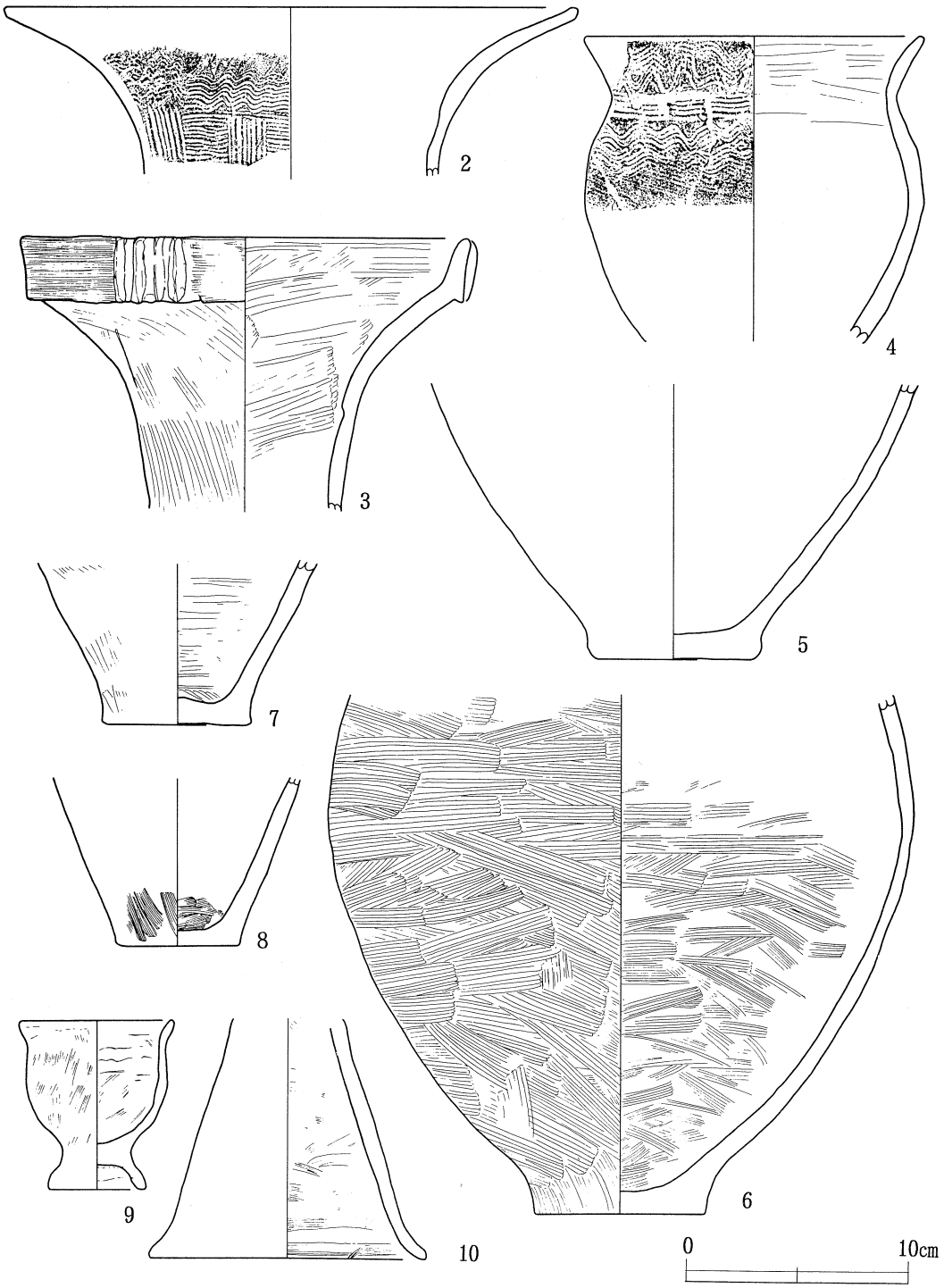
第8図　3号住居址平・断面図　（1／60）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
8	甕	−，　−，　5.5	黒・白色粒子を含む	淡茶褐色
		器面は刷毛目整形の後磨きにより仕上げてある。		体部下半〜底部破片
9	小型台付甕	7.7，　6.8，　4.5	金雲母を含む	内面−茶褐色　外面−黒茶褐色
		内面−輪積み痕がみられる　外面−刷毛目痕あり		⅓欠損
10	高坏	−，　−，　−	砂粒を含む	内面−淡茶褐色　外面−赤褐色一部黒変
		内面−刷毛目痕あり　外面−丁寧な磨きの後、丹彩される		脚部破片



1

第9図　3号住居址出土遺物　（1／3）



第10図　3号住居址出土遺物　（1／3）

＜4号住居址＞　（第11・12図）

〔遺　構〕

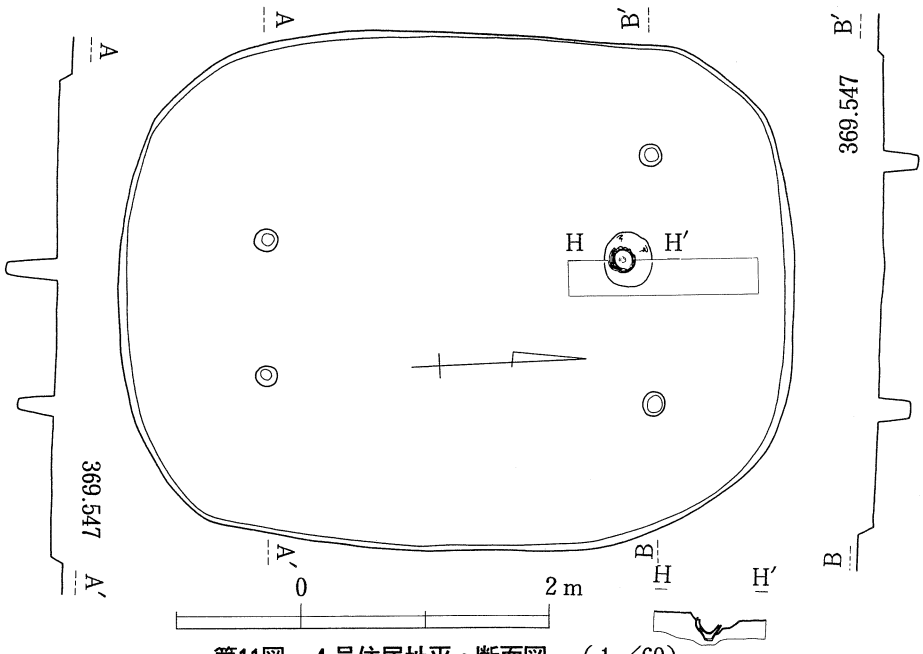
調査区域中央北側に位置する。規模は東西約4ｍ20㎝、南北約5ｍ40㎝を測る。平面形は小判形を呈する。暗黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを発見し掘り下げた。床面は略平坦。壁は外傾しながら立ち上がり、壁高は10㎝前後を測る。柱穴は4本が検出され、台形状に配されている。炉は北側2本の柱穴を結ぶ線上の中央よりも南西側にあり、土器を埋設してつくられていた。

〔遺　物〕

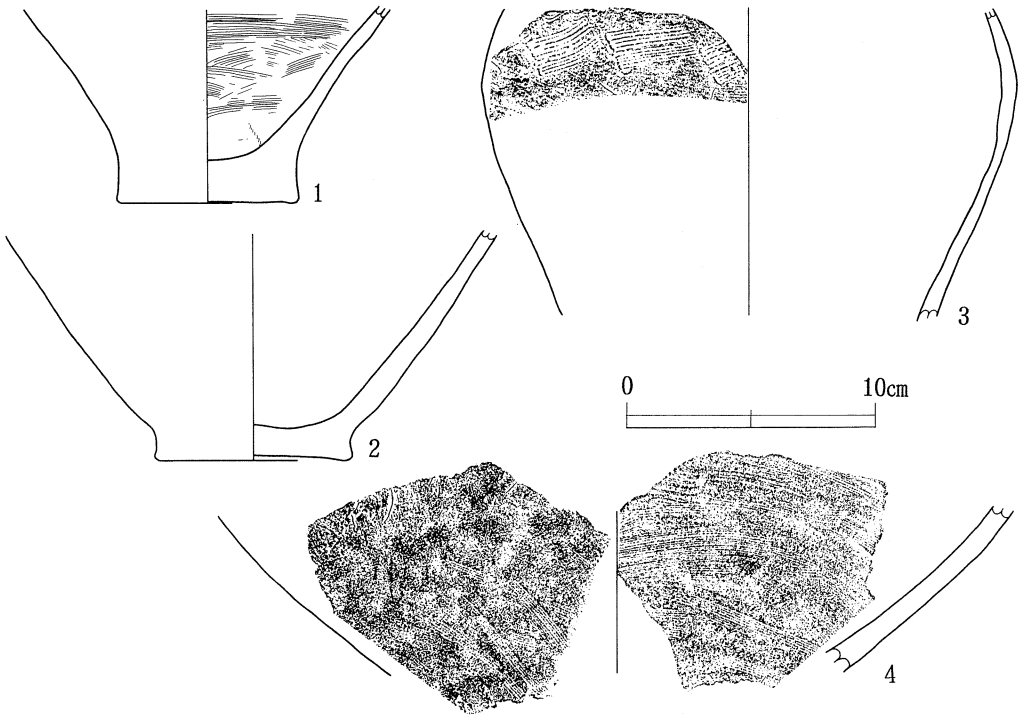
炉に用いられた甕形土器の破片のみである。

出土遺物一覧　　（単位　㎝）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	甕	－，　－，　7.2	金雲母・白色砂粒を含む	暗茶褐色
		内面－細かい刷毛目痕あり　外面－磨き		底部破片
2	甕	－，　－，　7.5	白色砂粒・金雲母を含む	内面－淡茶褐色　外面－黒茶褐色
		内・外面－磨きによる仕上げ		底部破片
3	甕	－，　－，　－	砂粒を含む	淡橙褐色
		胴部に刷毛目調整。外面に櫛描波状文と単線文が施される。		破片
4	甕	－，　－，　－	白色砂粒を含む	淡茶褐色
		内・外面－刷毛目調整		破片



第11図　4号住居址平・断面図　（1／60）



第12図　4号住居址出土遺物　（1／3）

＜5号住居址＞　（第13・14・15図）

〔遺　構〕

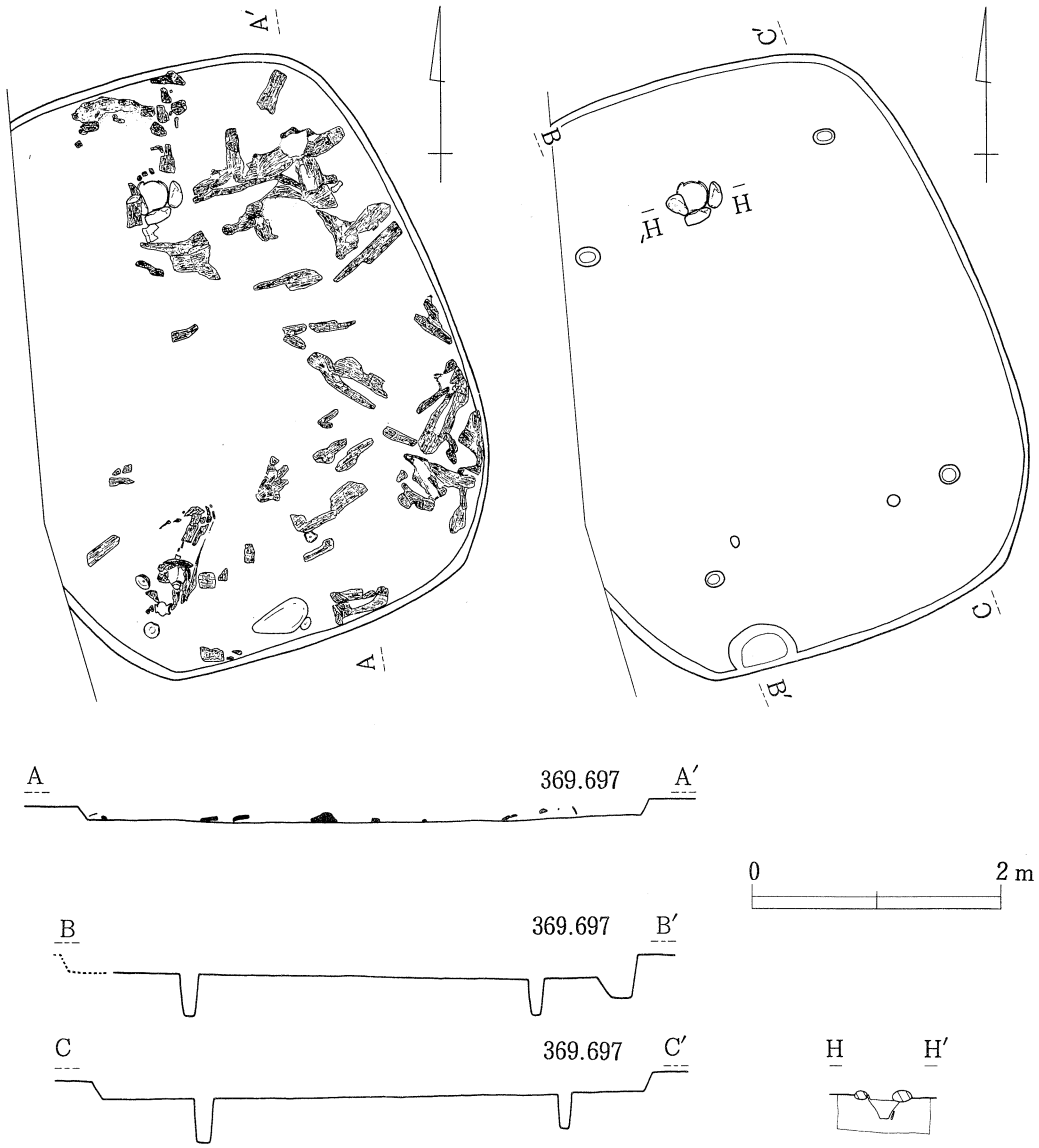
調査区域北西端に位置する。住居址西辺は遺存していなかった。暗黄褐色系土中に炭化物を混入する暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は長軸約4m80cm、短軸約3m70cmを測る。平面形は小判形に近い隅円長方形を呈する。床面は南側がやや低くなっている。柱穴は4本主柱穴で、長方形に配されている。柱穴の床面からの深さは30cm前後を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がり、壁高は15cm前後を測る。炉は北側2本の柱穴を結ぶ線上中央にあり、中心に甕形土器の胴部下半を埋設し、三方に石を配してあった。他に内部施設として、南壁際に55×40cmの不整楕円形をした穴が検出されている。

〔遺　物〕

丸太材乃至角材・板材と思われる炭化材が、四方の壁から中心に向かうように出土している。土器は南西隅側に集中していた。

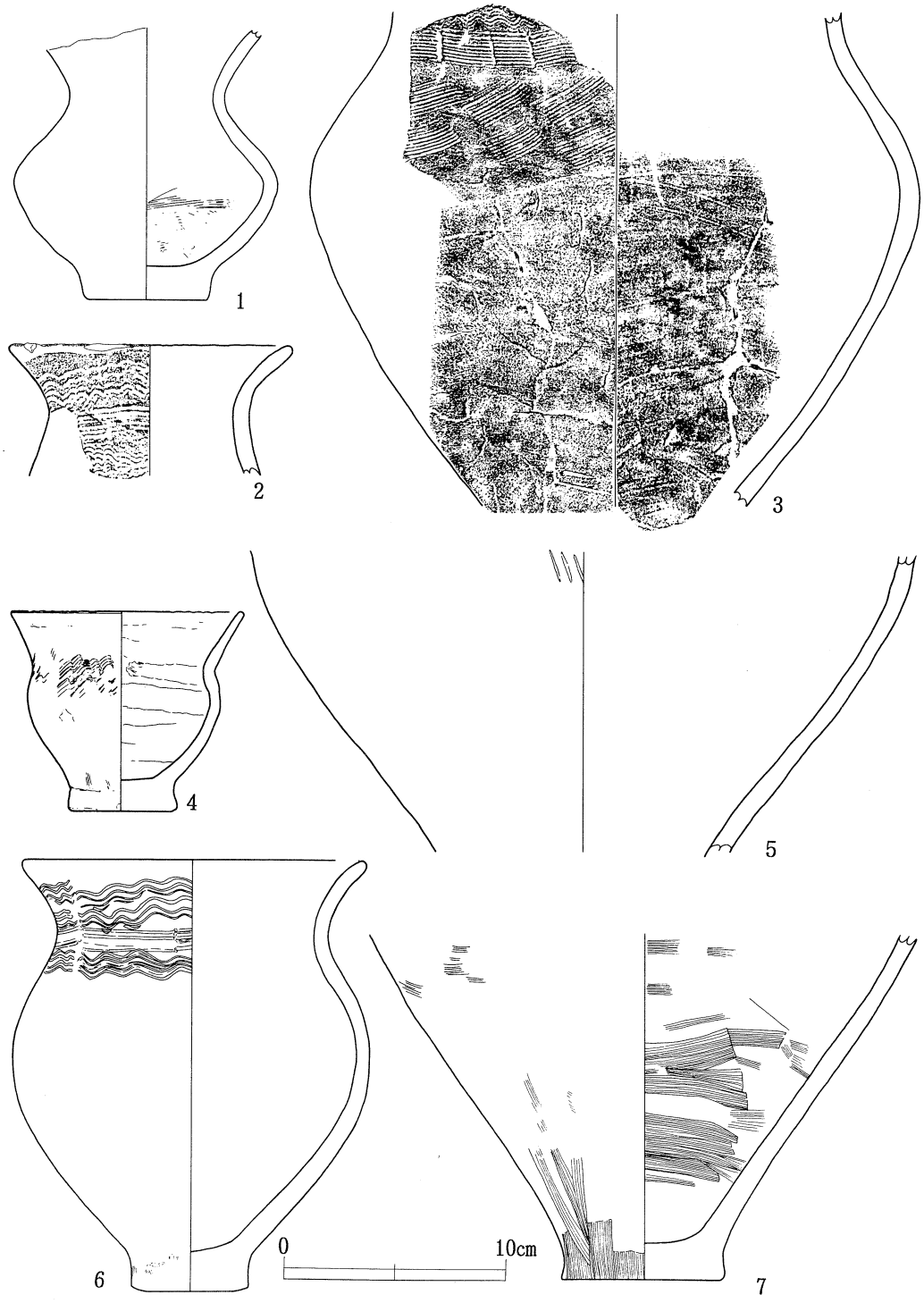
出土遺物一覧　　（単位 cm）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	小型壺	－，　－，　5.8	金雲母を含む	黒赤褐色
		内面－上半磨き。下半刷毛目痕あり。 外面－撫でによる仕上げ。細かい刷毛目痕がみられる。		口縁部欠損
2	甕	－，12.5，　－	砂粒を含む	赤灰褐色
		外面－口縁部および頸部にかけて櫛描の波状文・簾状文が施される。		口縁部破片

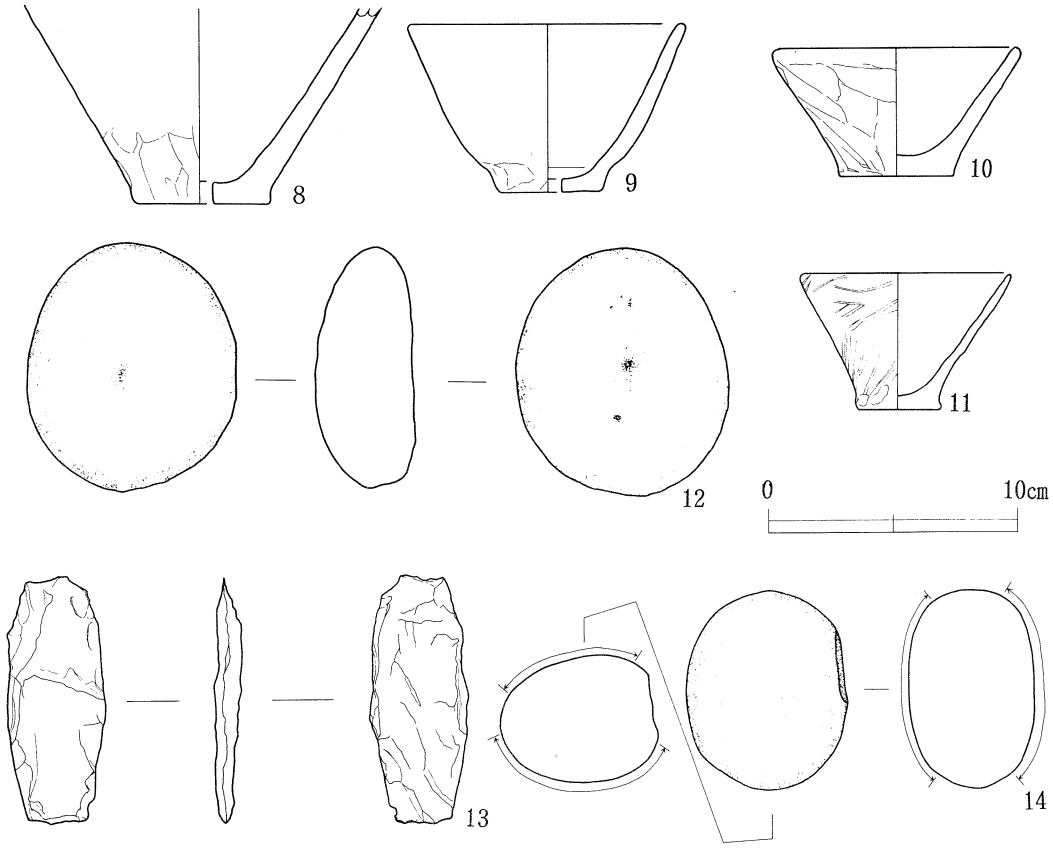


第13図　5号住居址遺物出土状態、平・断面図　（1／60）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
3	甕	−，　−，　−	粗い砂粒を含む	内面−灰赤褐色　外面−明赤褐色
		器面は撫で削り等による整形。頸部の櫛描簾状文を境に上に波状文、下に斜めの単線文が施される。	炉体土器	胴部破片
4	小型甕	9.0，10.2，　4.6	砂粒を含む	赤灰褐色
		口縁部は横撫でされ、刻目がめぐる。外面−頸部には櫛描波状文がみられる。胴部は撫でられるが、細かい刷毛目痕がみられる。内面−磨き。輪積み痕がみられる。		一部破損
5	甕	−，　−，　−	砂粒を含む	内面−黒灰褐色　外面−暗茶褐色
		内・外面−撫で及び磨きにより仕上げられている。	炉体土器	破片



第14図　5号住居址出土遺物　（1／3）

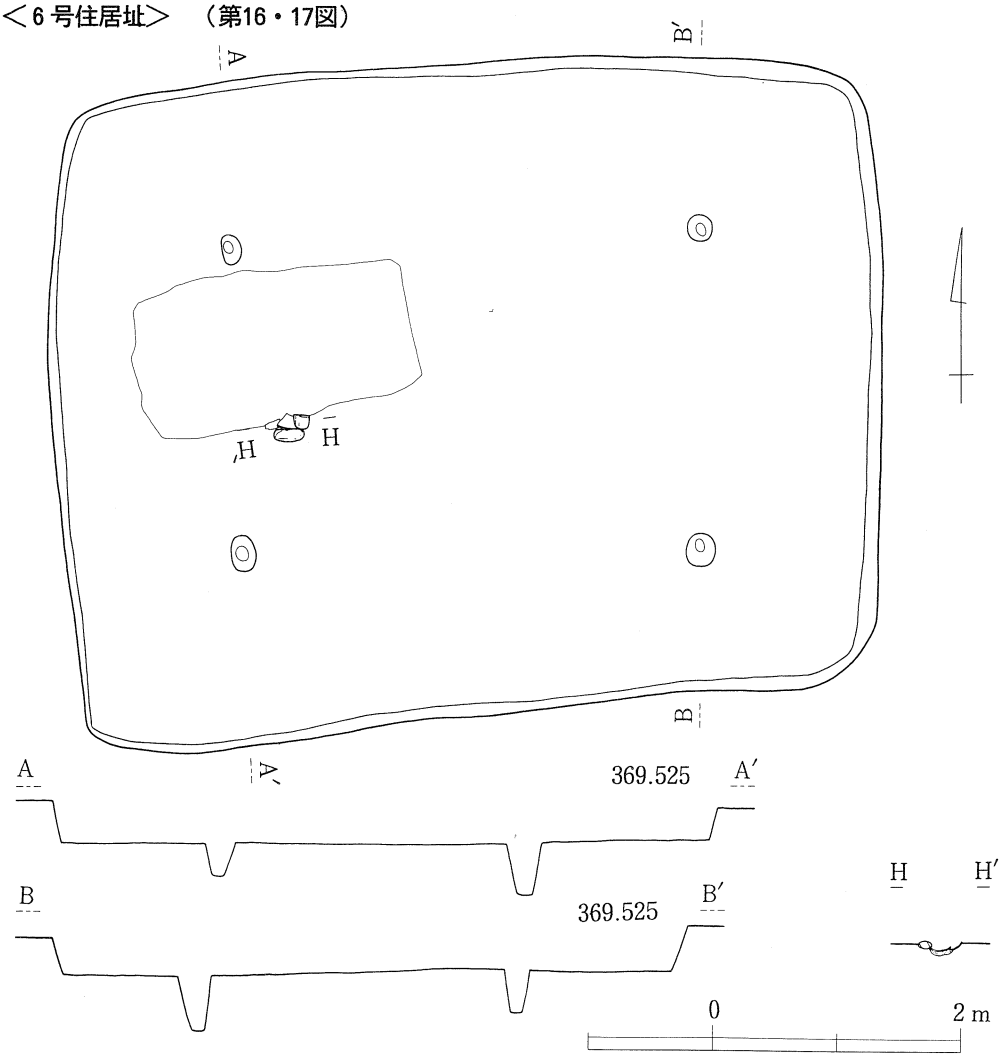


第15図　5号住居址出土遺物　（1／3）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
6	甕	16.4, 15.6, 5.4	微砂粒を含む	内面－赤褐色　外面－赤黒灰褐色
		口縁部横撫で。内・外面－磨きによる仕上げ。外面の頸部に櫛描簾状文が施され、その上下に波状文が施される。		一部破損
7	甕	－, －, 7.4	赤褐色粒子・微砂粒を含む	内面－白灰褐色　外面－赤茶褐色
		内・外面－磨かれるが、比較的細かい刷毛目痕がみられる。外面は丹彩される。炉体土器		胴部上半～口縁部欠損
8	甑	－, －, 5.4	赤褐色粒子・微砂粒を含む	白灰褐色
		内面－細かい刷毛整形　外面－粗いヘラ撫で　底部に単孔があく。		底部破片
9	甑	6.8, 11.2, 4.0	赤褐色粒子・砂粒を含む	内面－灰褐色一部黒変　外面－灰褐色
		内面－撫で　外面－磨滅によりザラついている　底部に単孔があく。		口縁部一部欠損
10	鉢	5.1, 10.1, 4.6	微砂粒を含む	赤褐色、みこみ部－黒斑
		口縁部－横撫で　内・外面－磨き・撫でにより仕上げ		一部欠損

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
11	鉢	5.5, 10.1, 4.6	砂粒・金雲母を含む	赤灰褐色
		内面－磨かれている　外面－粗い刷毛目痕がみられる		一部欠損
12	石器	—	—	—
		凹石		
13	石器	—	—	—
14	石器	長さ　8	—	—
		非常に握りやすい石で、親指・人差指・中指で持ち、他の指でささえるように用いたと思われ、親指の当たる部分は、打ちかいて平坦にしてある。表・裏二面に擦痕がある磨石。		

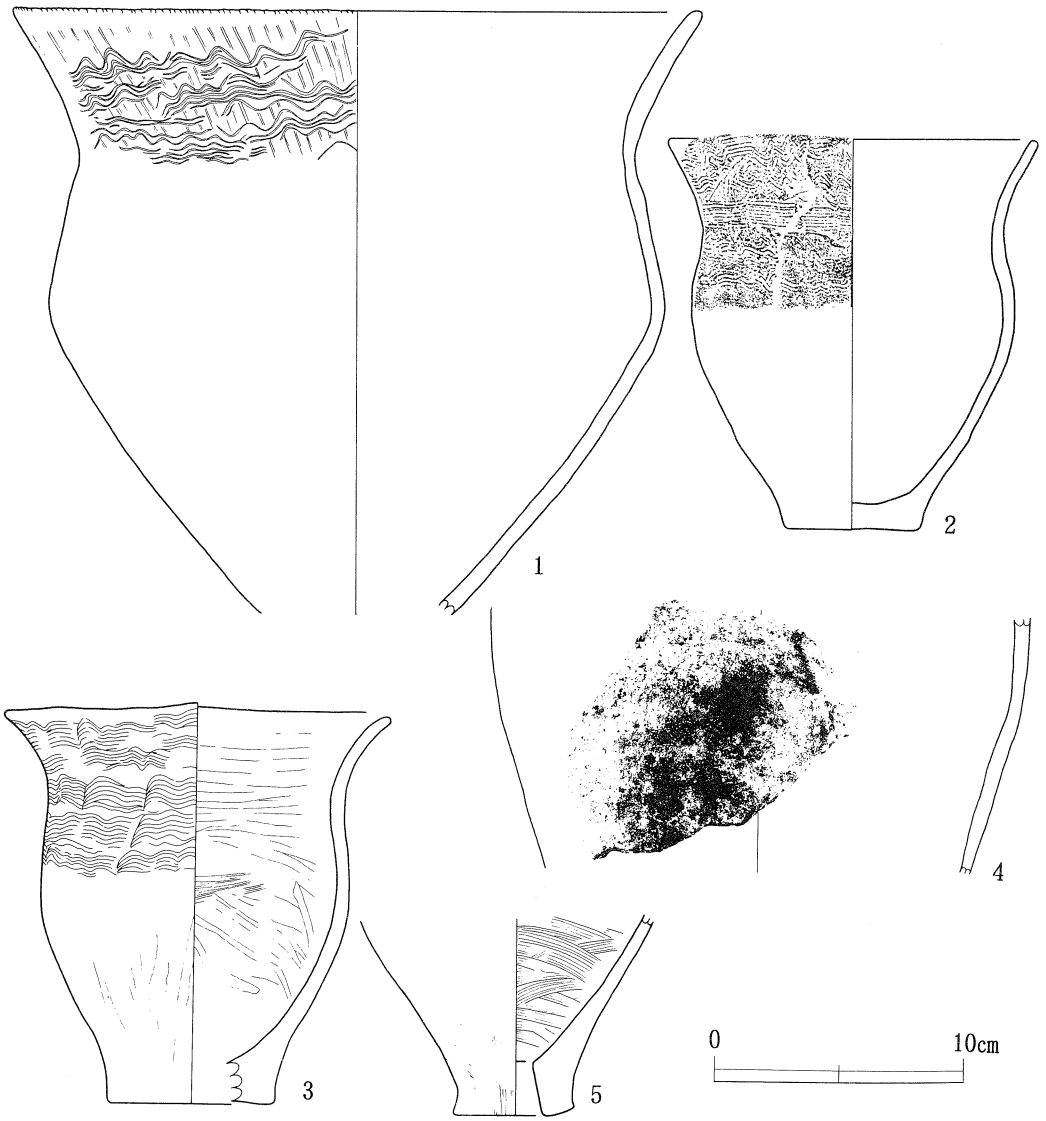
＜6号住居址＞　（第16・17図）



第16図　6号住居址平・断面図　（1／60）

〔遺　構〕

調査区域中央に位置する。遺跡の有無確認作業に際して、床面が検出された住居址である。平面形は隅円長方形を呈し、東西約６ｍ60㎝、南北約５ｍ30㎝の規模を測る。壁はやや外傾しながら良好な立ち上がりをみせる。壁は南側が低く、高さは25㎝前後～35㎝前後を測る。床面は南東側がやや窪んだようになっている。柱穴は４本柱穴で、長方形に配されている。柱穴の床面からの深さは、約25～44㎝で不揃いとなっている。炉は西側２本の柱穴間を結ぶ線上中央よりも東側に入り込んであり、北半部を試掘穴によって削られているが、中心に土器片を敷き三方に石を配してつくられていたと思われる。他に内部施設はない。



第17図　６号住居址出土遺物　（１／３・４の写真は不同、参考資料として添付）

〔遺　物〕

遺物の出土は少なかった。

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	甕	－，27.4，－	金雲母・白色砂粒を含む	内面－灰黄褐色　外面－茶褐色
		口縁部－横撫でされ、刻目がめぐる　内面－ヘラ磨き　外面－刷毛整形の後撫でられ、頸部に櫛描簾状文が施される		⅔欠損
2	甕	15.8，14.6，5.1	白色砂粒を含む	内面－灰褐色　外面－灰黄褐色
		器面は撫で乃至磨きにより仕上げられる。 外面－頸部に櫛描簾状文が施され、その上下に波状文が施される		¼欠損
3	甕	16.0，15.3，6.6	金雲母・砂粒を含む	内面－黄黒褐色　外面－黒褐色
		器面は磨きによる仕上げ。 外面－口縁部～頸部下にかけて櫛描簾状文が施される		⅔残
4	壷	－，－，－	白色砂粒を含む	内・外面－にぶい褐色
		外面－刷毛目の後、撫で	炉体土器	破片
5	甑	－，－，5.0	金雲母・白色砂粒を含む	内・外面－黒褐色
		器面は撫でによる仕上げ。刷毛目痕がみられる。		破片

＜7号住居址＞　（第18・19図）

〔遺　構〕

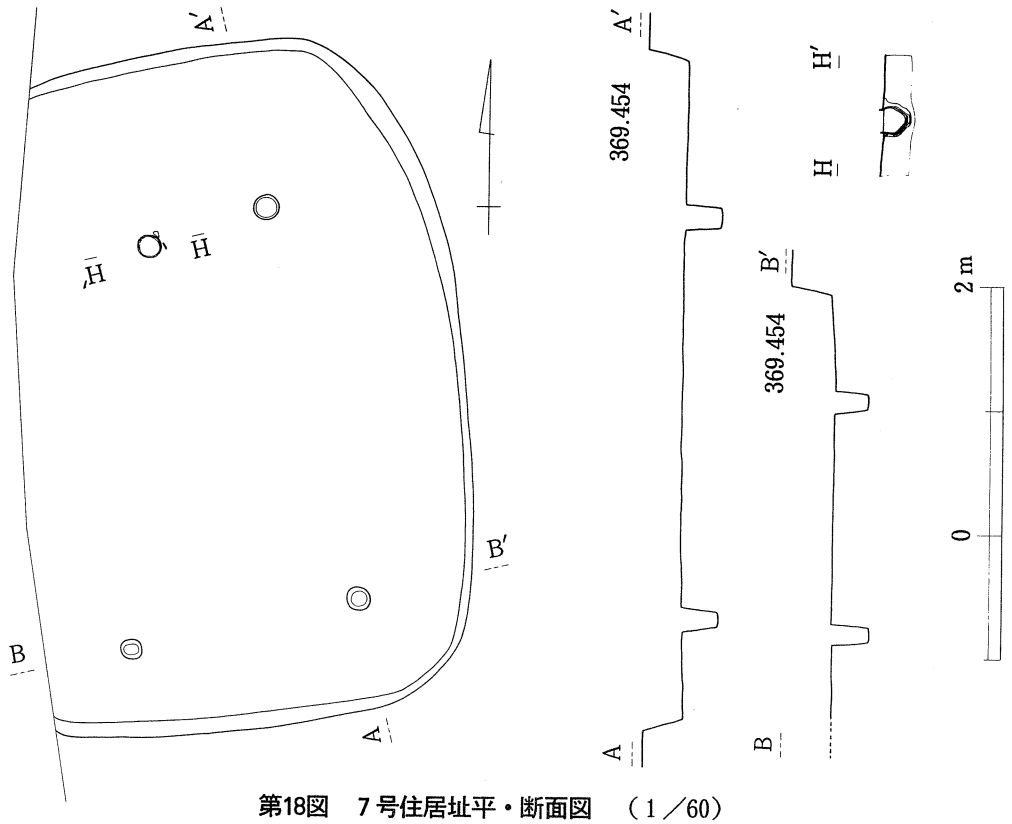
調査区域中央西端に位置する。住居址西辺は、耕地により遺存していない。暗黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。平面形は小判形に近い隅円長方形を呈するものと思われる。規模は長軸で約5m50cmを測る。床面は略平坦。壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせる。柱穴は3本しか検出されなかったが、本来は4本で長方形に配されていたと思われる。柱穴の床面からの深さは30cm前後を測る。炉は北側2本の柱穴を結ぶ線上の中央に位置すると思われる所にあり、甕形土器の胴部下半を2つ重ねて埋設してあった。

〔遺　物〕

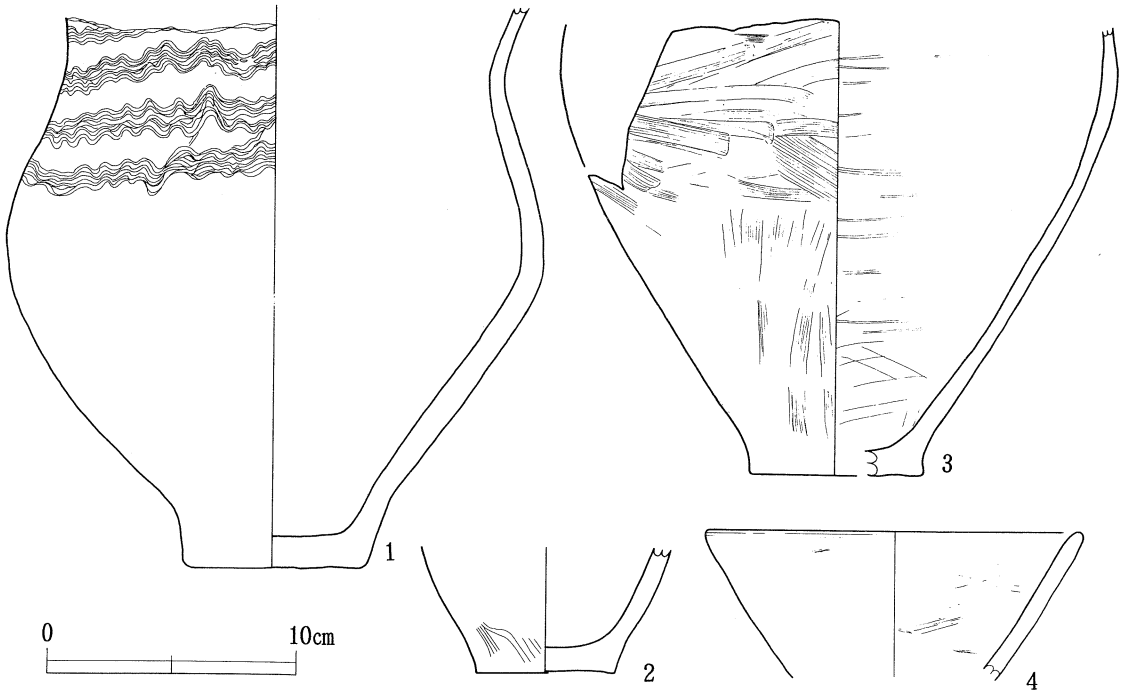
遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	甕	－，－，7.3	金雲母・白・黒色粒子を含む	橙色系
		内面－刷毛整形の後粗いヘラ磨き　外面－刷毛整形の後撫で、粗いヘラ磨きがなされ、頸部に波状文が施される	炉体土器	口縁部欠損
2	甕	－，－，5.75	赤褐色粒子・砂粒を含む	明赤褐色
		器面は磨滅によりザラつくが、撫で、磨きにより仕上げられる。		底部破片



第18図　7号住居址平・断面図　（1／60）



第19図　7号柱居址出土遺物　（1／3）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
3	甕	－，　－，　7	砂粒を含む	内面－にぶい橙・灰褐色　外面－橙灰褐色
		器面は撫で、磨きにより仕上げられるが、刷毛目痕がみられる。　⅔欠損		
4	鉢	－，　15，　－	金雲母・砂粒を含む	内面－にぶい黄橙　外面－灰黄褐色
		口縁部　横ナデ、器面は撫でにより仕上げられるが、刷毛目痕がみられる。口縁部破片		

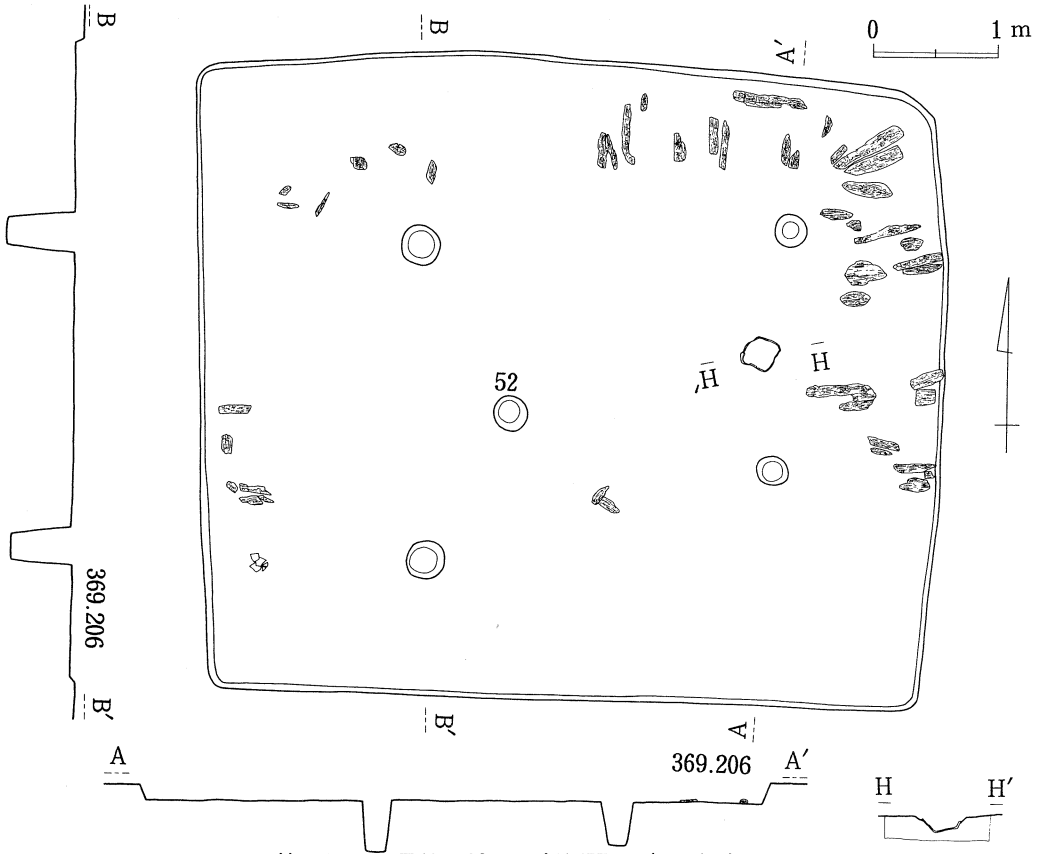
＜10号住居址＞　（第20・21図）

〔遺　構〕

調査区域南端に位置する。削平により浅い竪穴となっている。規模は東西約６ｍ、南北約５ｍ10㎝を測る。平面形は略長方形を呈する。床面は平坦。柱穴は４本主柱穴で、床面からの深さ35㎝～50㎝前後を測る。別に床面中央付近に、深さ52㎝程の穴がある。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ５～17㎝を測る。炉は東側２本の柱穴を結ぶ線上の中央やや西寄りにあり、壷形土器を欠いて横たわせて埋設してあった。

〔遺　物〕

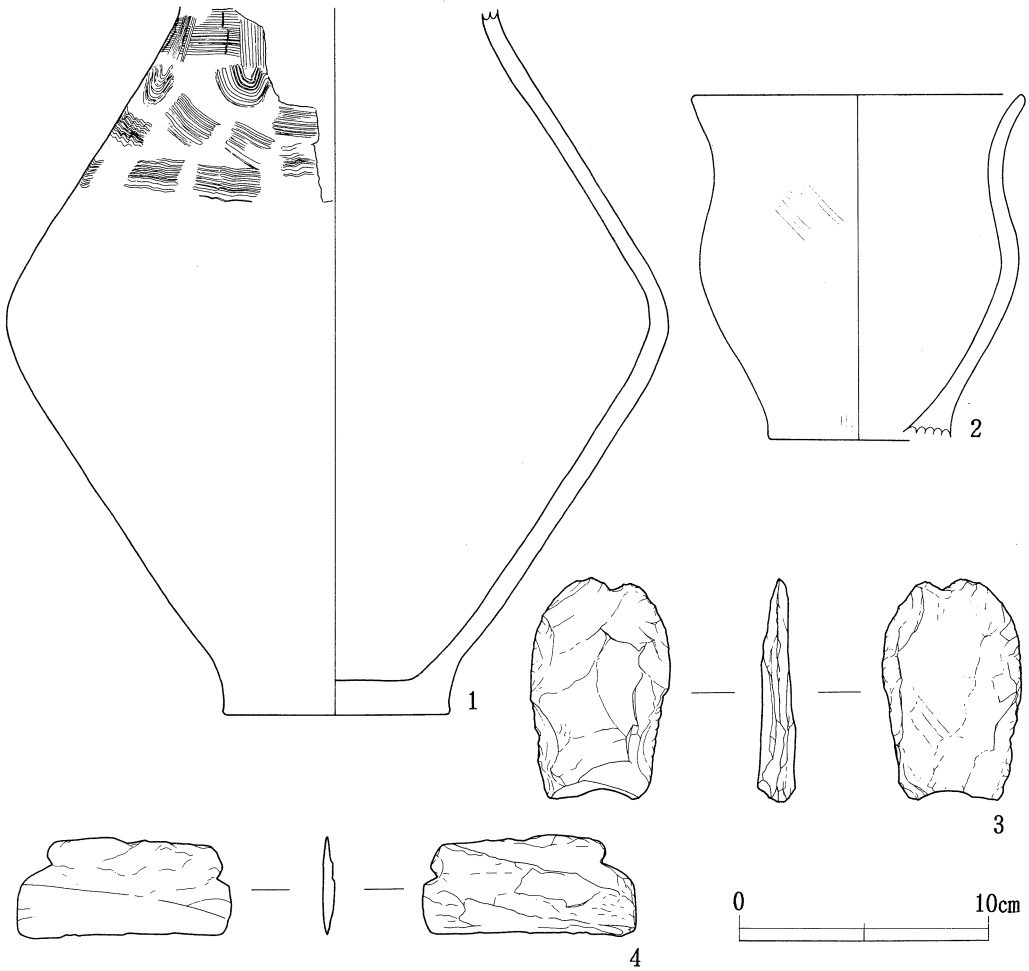
炭化材が散在していた。遺物の出土は多くなかった。



第20図　10号住居址平・断面図　（１／60）

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	器種	法量等（器高・口径・底径）	胎土	色調
		整形・特徴・その他		
1	壷	－，　－，　9.2	やや粗い、金雲母・白色粒子を含む	内・外面－にぶい橙色系
		内面－ヘラ磨きされるが、胴部下半に刷毛目痕がみられる　外面－刷毛製形の後撫で乃至磨き。頸部に平行線文とそれに直行する単線文が施され、胴部には「U」字状の弧線文と平行単線文が施される。　炉体土器　3／5欠損		
2	壷	13.9，13.4，　－	やや粗い、金雲母・砂粒を含む	内面－にぶい褐色系　外面－にぶい橙色系
		口縁部　横撫で。器面は撫で、磨きにより仕上げ。　外面－刷毛目痕あり、胴部に煤付着。口縁部～胴部下半の破片		
3	石器	－	－	－
		打製石斧		
4	石器	長さ 8.6　巾 4 厚さ 0.5	－	－
		長方形の薄い石包丁で、片側に刃をつけ、その反対側に横から抉りをつけてある。		



第21図　10号住居址出土遺物　（1／3）

2　平安時代以降の遺構と遺物

＜8号住居址＞　（第22図）

〔遺　構〕

調査区域北辺中央部分に位置する。規模は東西約3ｍ70㎝、南北約4ｍを測る。平面形は隅円方形を呈する。床面は略平坦。壁高は5～10㎝前後を測り、浅い竪穴である。北壁西側に石で囲んだ張り出し部分があり、カマドと思われるが詳細は不明。柱穴・周溝はない。

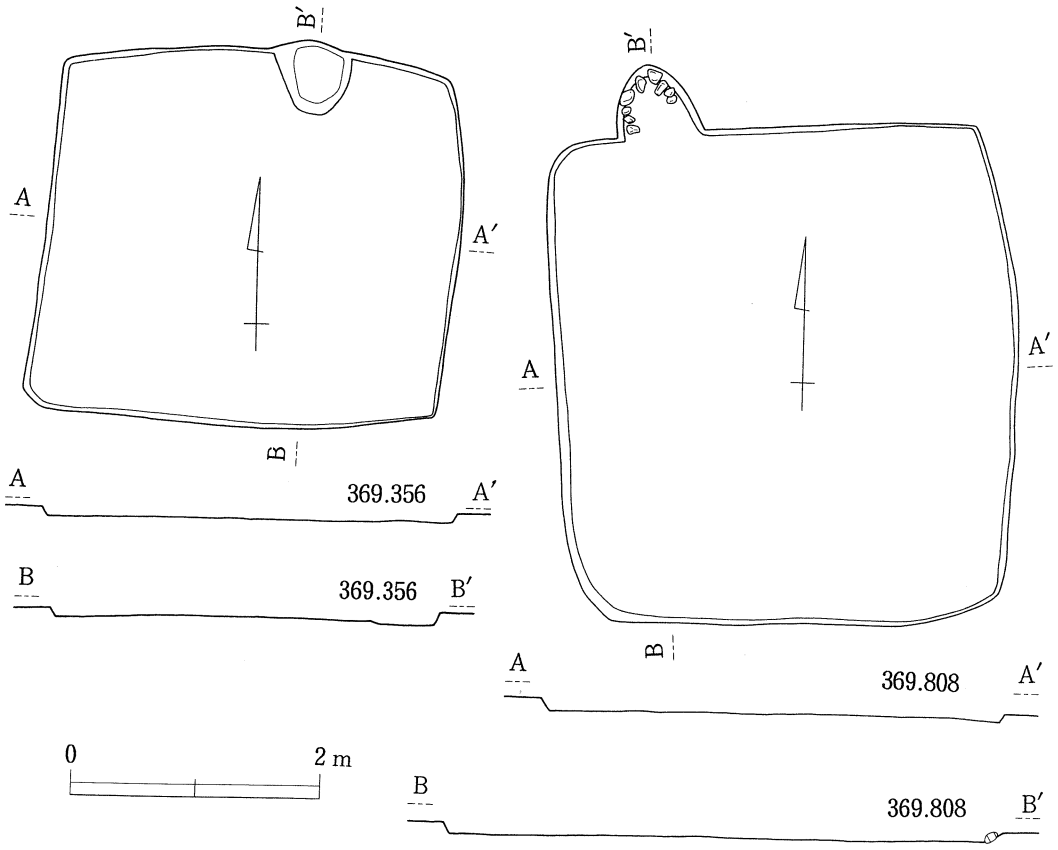
〔遺　物〕

土師器の破片が若干出土している。

＜9号住居址＞　（第22・23図）

〔遺　構〕

調査区域南側西寄りに位置する。規模は東西約3ｍ30㎝、南北約3ｍを測る。平面形は不整の方形を呈する。床面は中央がやや高い。壁高は8㎝前後で、浅い竪穴となっている。カマドは、北壁東寄りに構築されていたと思われるが、若干の焼土が確認されたのみである。柱穴・周溝はない。



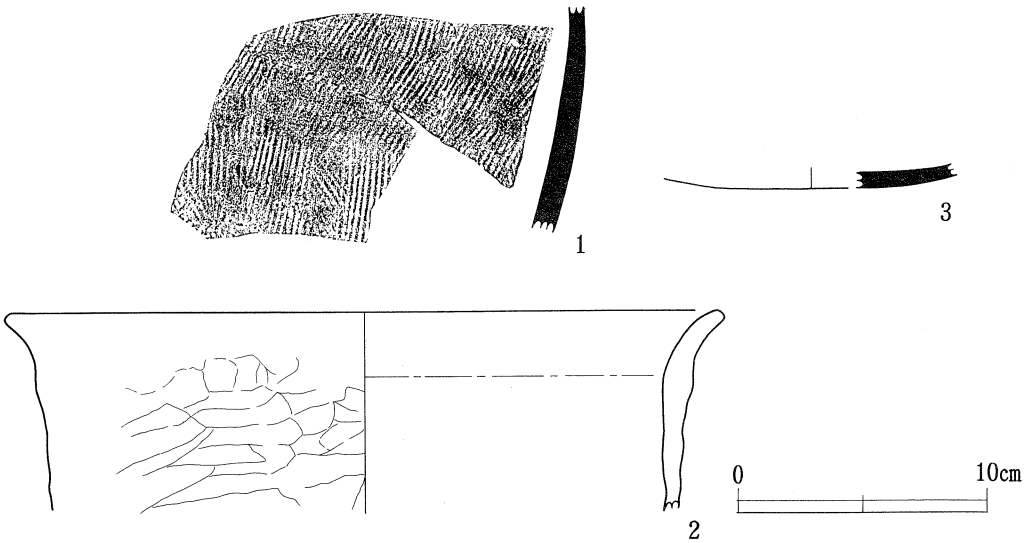
第22図　8号・9号住居址平・断面図（1／60）

〔遺　物〕

遺物は極めて少ない。

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	種　類	器形	法　量 器高・口高・底径	胎　土	色　調	整形・特徴・その他
1	須恵器	甕	－，－，－	赤褐色粒子 白色粒子を 含む	灰　色	外面叩目 破片
2	土師器	甕	－，29.0，－	赤褐色粒子 砂粒を含む	にぶい 橙色系	口縁部横撫で 胴部内面撫で、外面ヘラ削り 口縁部破片
3	須恵器	坏	－，－，－	赤褐色粒子 白色粒子を 含む	内面灰色 外面赤褐色	内面に擦痕が認められる 転用硯か？ 底部破片



第23図　9号住居址出土遺物（1／3）

＜ その他の遺構 ＞

集石は、挙大～人頭大以上の石が北から南へ約11ｍの長さで集まっているが、遺物も出土せず性格等は不詳。

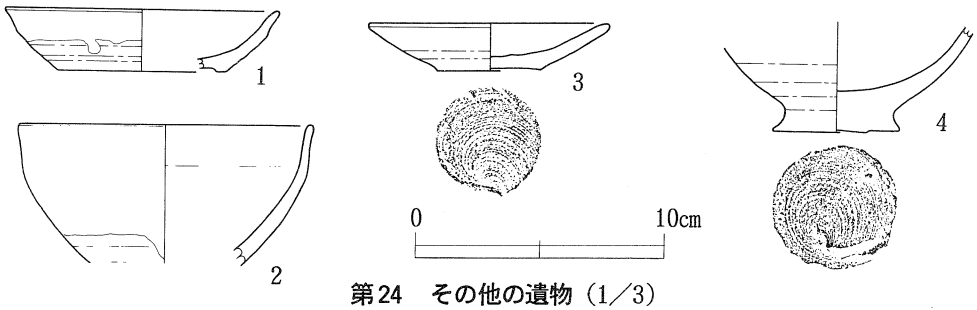
調査区域東端には、埋没した大きな沢が入り込んでいるが、時期等の性格は不明である。

＜ その他の遺物 ＞（第24図）

図に示した遺物は、明確な遺構にともなうものではないが、７号住居址の東側に床面が散在して確認された際に出土したものが主体となっている。耕作等による削平を考慮すると、平安時代末～中世にかけての、住居址等の何らかの施設が存在していたものと思われるが、調査段階では詳しいことは解らなかった。

出土遺物一覧　　（単位　cm）

番号	種　類	器形	法　量 器高・口高・底径	胎　土	色　調	整形・特徴・その他
1	陶　器	皿	2.5 , 11.0 , 6.2	微砂粒を含む		釉がかけられている 釉の部分は緑黄白色、他は明茶灰褐色 破片
2	陶　器	碗	－ , 11.9 , －	微砂粒を含む		鉄　釉 破片
3	土師器	皿	1.9 ,　9.6 , 4.2	金雲母を多量に含む	内　面 にぶい褐色系 外　面 褐色系	ロクロ水挽 底部回転糸切り痕 ¼欠損
4	土師器	碗	－ ,　－ , 5.1	金雲母を多量に含む	内　面 暗灰黄色系 外　面 にぶい黄色系	ロクロ水挽 底部回転糸切り痕 口縁部欠損



第24　その他の遺物（1／3）

V　下横屋遺跡の炭化材樹種同定

平成2年8月　藤根　久（パレオ・ラボ）

1　はじめに

下横屋遺跡は、弥生時代後期後半～末に相当する住居址からなる。ここでは、3号住居址、5住居址、10号住居址から出土した炭化材の一部について樹種の検討を行う。

樹種同定に供した試料数は、3号住居址がC－1～C－12の12点と一括試料5点、5号住居址がC－1～C－5の5点と一括試料2点、10号住居址がC－1～C－4の4点である（表1）。

2　方法と記載

試料は、同定を行うに当たって、実体顕微鏡下で可能と思われる部分を観察し、材組織が明瞭な部分を片刃カミソリなどを用いて横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）および接線断面（板目と同義）の3断面を可能な限り作成した（図1）。これらの試料は、直径1㎝の真鍮製の試料台に固定し、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子製　ＪＳＭ　Ｔ－100型）で観察し、現生標本との比較により、樹種の検討を行った。

以下に、観察による特徴記載および樹種同定の根拠を示し、電子顕微鏡写真を示す。

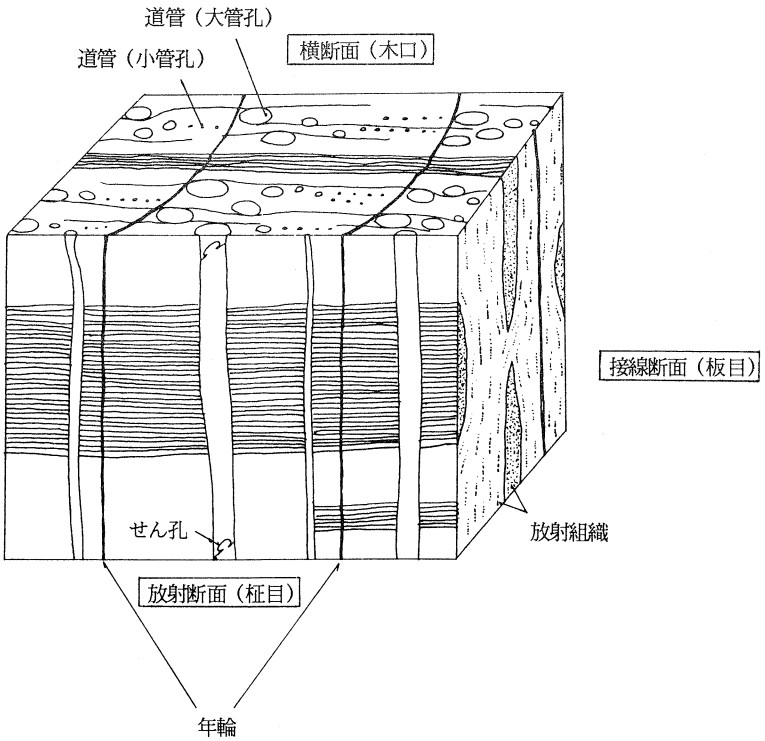


図1　木材組織（クヌギ節の模式図）

コナラ属コナラ節　Quercus　sect.　Prinus　ブナ科

年輪のはじめに大管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火災状に配列する環孔材である。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である。放射組織は単列同性のものと集合放射組織からなる。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節（Quercus　Sect.　Prinus）の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Quercus　serrata）やミズナラ（Q.mongolica）、カシワ（Q.dentata）、あるいはナラガシワ（Q.aliena）などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹で、温帯から暖帯にかけて広く分布する。これら木材は重硬緻密で、建築造作材や家具材、枕木、曲木細工などに用いられる。

概観の特徴は、代表種のコナラでは、樹皮は灰白色、コルク層は厚くはないが縦に不規則に割れ、葉は互生し、長さ7.5〜10cmの長楕円形で葉先は鋭尖形または鋭形である。また、堅果は長楕円形または楕円形で、長さ1.6〜2.2cmである。さらに、引張および曲げ強度は、クヌギに比べ1.5倍から2倍と大きい。

コナラ属クヌギ節　Quercus　sect.　Aegilops　ブナ科

年輪のはじめに大管孔が1〜2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる。放射組織は単列同性のものと集合放射組織のものとがある。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ（Quercus　acutissima）と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ（Q.variabilis）があるが、識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹で、木材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、器具材や車両材、下駄材、薪炭材、椎茸原木などに用いられる。

概観の特徴は、代表種のクヌギでは、樹皮は灰褐色で、コルク層は厚くないが縦に不規則に割れ、葉は互生し、長さ8〜15cm、長楕円状披針形、葉先は尖鋭形でまれに鈍形である。また、堅果は球形で、径2.0〜2.3cmである。

ケヤキ　Zelkova　serrata（THUNB.）Makino　ニレ科

年輪のはじめに大管孔が1ないし2列に並び、夏材部では小管孔が2〜11程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚（道管の内壁に沿ってらせん状に肥厚が生じたもの：図版　3C.放射断面）が明瞭に認められる。放射組織は、1〜10細胞幅、6〜39細胞高の異性細胞から構成されている。

以上の形質から、ニレ科のケヤキと同定される。ケヤキは樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹で、暖帯から温帯にかけて分布する。ケヤキの材は、光沢があり木理が美しく、耐朽性があり通直な材が得られる。社寺などの柱あるいは梁などに多く用いられる。

広葉樹（環孔材）

年輪のはじめに大管孔が1ないし3列に並び、夏材部では小管孔が1個あるいは2個放射方向に複合し配列する環孔材である。道管のせん孔は単一であり、小管孔にはらせん肥厚は認められない。放射組織は、1～5細胞幅、5～32細胞高の異性細胞から構成されている。

ニレ科あるいはクワ科のヤマグワの材の可能性があるが、特定はできない。

ニシキギ属　Euonymus　sp.　ニシキギ科

小管孔が全体的に密に配列する散孔材である。道管のせん孔は単一で、道管の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる。放射組織は、単列まれに2列、3～20細胞高の同性細胞から構成されている。

以上の形質から、ニシキギ科のニシキギ属の材と同定される。ニシキギ属の樹木は、樹高15m、幹径40cmに達するマユミ（Eucnymus　sieboldianus）や樹高2m程度の低木のコマユミ（E.alats f.　ciliatodentatus）などがあり、温帯から暖帯にかけて分布する。材は堅くて緻密で粘り強く、版木や彫刻材などに用いられる。

表1　住居址出土炭化材のタイプとその樹種

住居址番号	試料番号	タイプ	樹種	備考
3　号	C－1	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－2	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－3	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－4	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－5	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－6	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－7	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－8	Ⅲ	コナラ節	
〃	C－9	Ⅱ	ケヤキ	
〃	C－10	Ⅲ	コナラ節	
〃	C－11	Ⅲ	コナラ節	
〃	C－12	Ⅲ	コナラ節	
〃	C－13		コナラ節	一括試料
〃	C－14		コナラ節	一括試料
〃	C－15		コナラ節	一括試料
〃	C－16		コナラ節	一括試料
〃	C－17		コナラ節	一括試料
5　号	C－1	Ⅲ	クヌギ節	
〃	C－2	Ⅱ	ニシキギ属	
〃	C－3	Ⅲ	クヌギ節	
〃	C－4	Ⅲ	クヌギ節	
〃	C－5	Ⅱ	クヌギ節	
〃	C－6		広葉樹	一括試料
〃	C－7		クヌギ節	一括試料
10　号	C－1	Ⅱ	コナラ節	
〃	C－2	Ⅲ	コナラ節	
〃	C－3	Ⅳ	コナラ節	
〃	C－4	Ⅲ	コナラ節	

Ⅱタイプ：　住居の辺および接線方向と平行する
Ⅲタイプ：　住居の辺および周に直交・斜交する
Ⅳタイプ：　上記以外

3　おわりに

出土した炭化材すべてではないが、一部についてその樹種を検討した。ここでは、炭化材の出土状態と樹種について若干の考察をする。

一般的に、竪穴住居の建築構造は、掘立て柱が4本、これら柱間4方向に梁（もしくは桁）を渡し、これらの梁（桁）を支えに垂木を立てかけ、さらにカヤの類で屋根を葺いていたようである（石野、1987）。これらの建築構造は、その時代・地域・建築物の機能などにより違いはあると考えられるが、柱・梁（桁）・垂木・葺き材の基本部材は少なからず存在すると考えられ、これらの部材は炭化材として出土する可能性が十分あると考える。

住居址から出土する炭化材は、多くが木本質からであることから、柱・梁（桁）・垂木のいずれかの可能性が高いと思われる。こうした状況を前提に、炭化材の出土状態についてのタイプ分けを試みる。なお、このタイプ分けの対象となる炭化材は、単独の炭化材の場合には、ある程度の大きさをもつもので、これ以外の場合には、個々の炭化材の長辺と材の伸長方向が一致し、かつ全体として方向性のある集合体に対して行うものである。

第1のタイプは、今回の試料では出土していないようであるが、柱穴内から出土する炭化材である。これは、柱材の可能性が高いものである（Ⅰタイプ）。

第2のタイプは、方形あるいは長方形プランの場合は、その各辺に対して平行もしくは平行に近い分布を示すもので、円形あるいは楕円形プランの場合には、その周の接線方向に平行もしくは平行に近いものである。これらは、主に梁（桁）のような部材に相当すると考える（Ⅱタイプ）。

第3のタイプは、辺あるいは周に対し直交または斜交するものである。これらは、主に垂木のような部材に相当するものと考える（Ⅲタイプ）。

第4のタイプは、Ⅰ～Ⅲタイプ以外の方向性を示さないものである（Ⅳタイプ）。これは、建築部材とは関係ないものや建築部材であったものが焼失落下時にその方向性を失ったものなどが含まれる。

こうしたタイプと樹種との関係について見ると、3号住居址では、C－1～C－7およびC－9以外はⅢタイプでありコナラ節の材から構成されていることが分かり、出土する他のⅢタイプの炭化材はコナラ節の可能性が高いと思われる。C－9は、Ⅱタイプの炭化材でケヤキである。このタイプの炭化材は極少ない。C－1～C－7は、小片からなりⅣタイプであるが、他のⅢタイプの炭化材と同様コナラ節の材から構成されることから建築部材の可能性が高く、むしろこの区画および周辺では炭化材の出土が少ないことから、焼失および保存の程度の違いを反映している可能性がある。全体としてはコナラ節の材を多く使用したようである。

5号住居址では、C－2とC－5がⅡタイプでは他はⅢタイプである。この住居址では、タイプと樹種の関係は明瞭ではない。ただし、全体としてはⅢタイプが多く、使用した樹種としてはクヌギ節の材が多いようである。

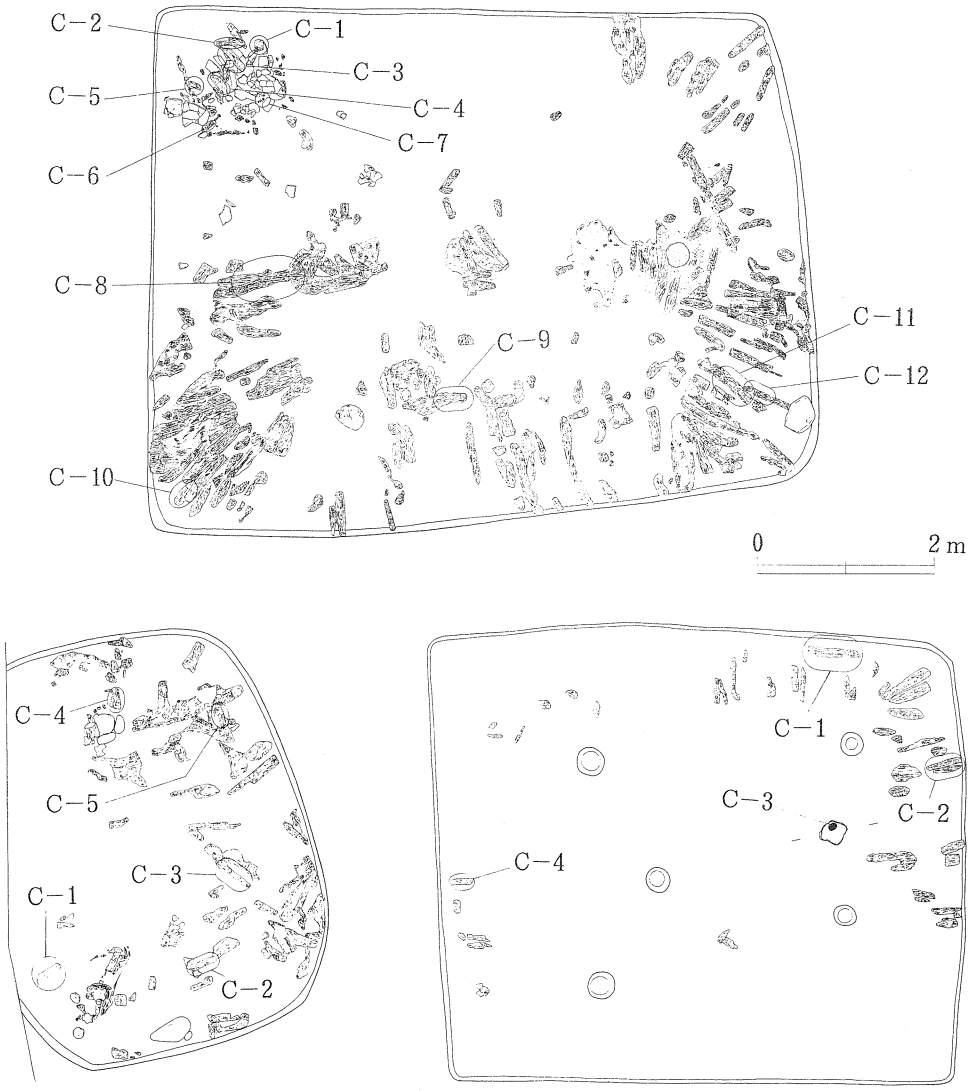
10号住居址では、5号住居址同様、タイプと樹種の関係は明瞭ではない。ただし、全体としてはⅢタイプが多く、使用した樹種としてはコナラ節が多いようである。

このように、部材に関する樹種の違いは不明瞭であるが、炭化材の出土状態によるタイプ分けから、住居址ごとの建築部材に使用した樹種は明確に異なることが分かる。

また、当遺跡周辺では、使用された樹木が多かったことが予想される。

参考文献

石野博信（1987）：日常の住居建築、「古代日本の知恵と技術」朝日カルチャーブックス28、大阪書籍、43－90.



第25図　住居址出土炭化材試料位置図

Ⅵ　ま　と　め

今回の発掘調査で発見された住居址は10軒で、出土遺物により弥生時代8軒（1・2・3・4・5・6・7・10号住居址）、平安時代2軒（8・9号住居址）となっている。時代ごとに概観しまとめとする。

1　弥生時代

壺形土器は、喇叭状に開く口縁のもの、折り返し口縁のもの、複合口縁外側に棒状浮文が付けられるものなどがみられる。器面に施された文様は、櫛描波状文・平行線文とそれに直行する単線文・平行単線文乃至斜めの単線文・「U」字形の孤線文がある。甕形土器は、大小が存在する。器面に施された文様は、櫛描波状文・簾状文・単線文があり、刷毛目痕の顕著なものもある。他に甑・小型台付甕・鉢・高坏・小型手捏土器等が出土しており、高坏は脚部破片であるが外面に赤色塗彩されたものである。これら竪穴住居址から出土した土器は、形態及び文様の特徴等から弥生時代後期後半～末に位置付けられるものであろう。土器以外に、10号住居址の床面直上から穂摘み用の石包丁が出土しており、稲作農耕を研究する上で貴重な発見と言える。

住居址の平面形態は、おおまかに小判形と長方形に大別できる。形態上から変遷を眺めてみると、一般的に小判形→隅円長方形という変化が言われているが、遺物の詳細な分類と土器編年によって捉えていく必要があろう。ただし、1・4・5・7号住居址は小判形、2・3・6・10号住居址は長方形というふうに、住居址の大小は別として群に分けられる。

2　平安時代以降

2軒の竪穴住居址は、削平が著しく出土遺物が極めて少ないので明確ではないが、北にカマドをもつ形態は、比較的古い時期のようである。

平安時代末～中世の遺物の出土は、当該地に何らかの施設があったことを物語っている。

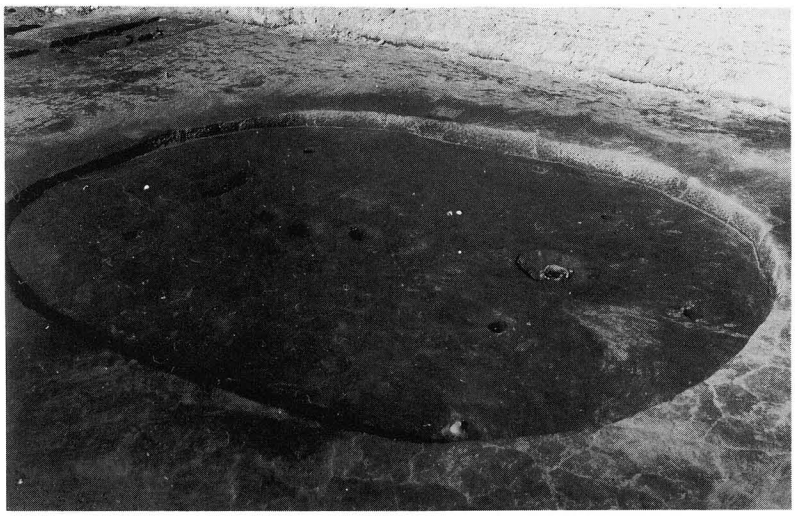
おわりに

本遺跡の発掘によって、当該地域には弥生時代後期の集落が形成されていたことが明瞭となった。弥生時代は稲作に代表される文化の時代であり、穀倉地帯藤井平の現在に至る基礎を形成したと思われる遺跡が発見されたことは、地域の歴史文化を考究し後世に伝えていく上で意味のあるものである。また、平安時代以降の遺構と遺物の発見は、当該地域の歴史の継続的な発展を物語るものであり、今回の発掘調査は有意義であったと言える。

第26図　下横屋遺跡調査区域（1／1,000）

写　真　図　版

遺 跡 遠 景



炉

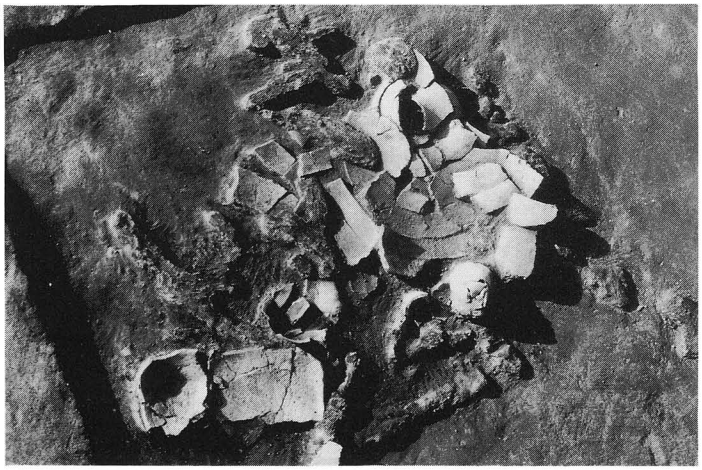
1 号住居址及び出土遺物

4

8

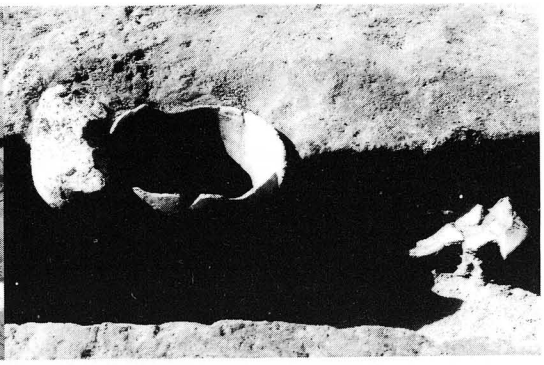
2 号住居址

3 号住居址
及び出土遺物



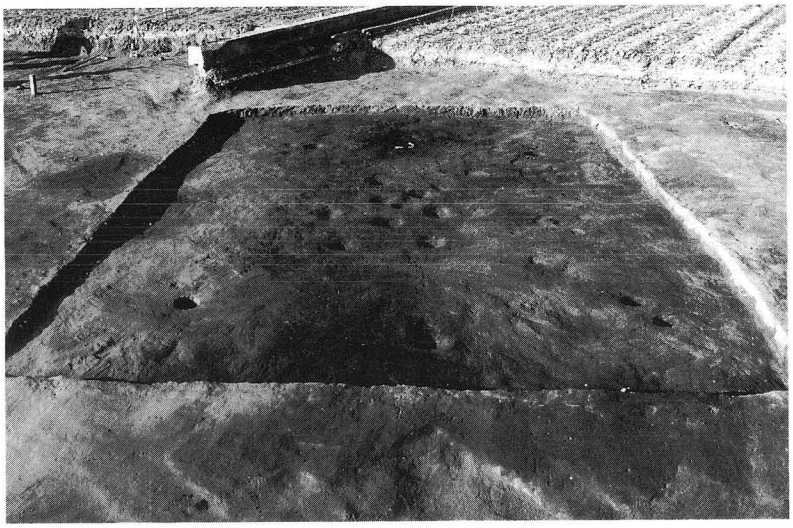
1

発掘風景



炉

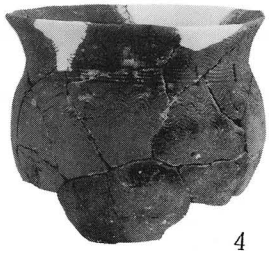
3号住居址
及び出土遺物



3

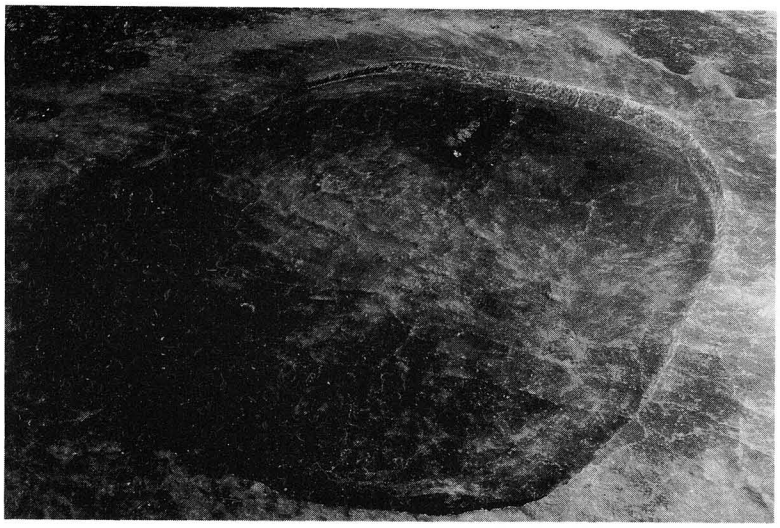
6

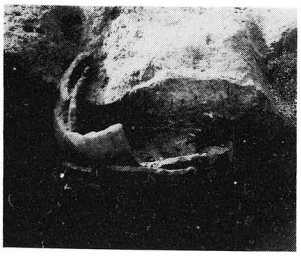
9



4

10

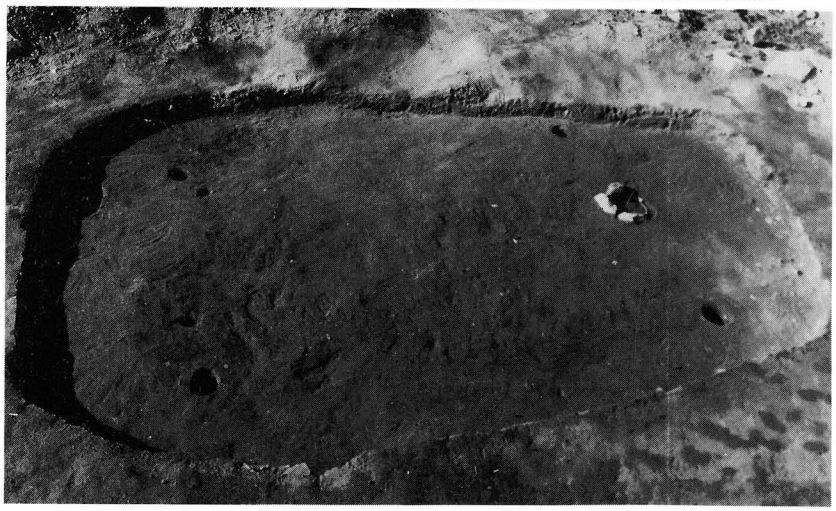


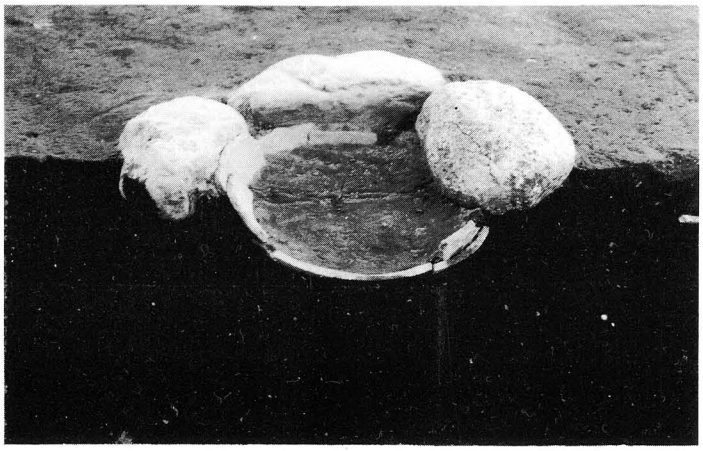


炉

4号住居址

5号住居址





炉

1

4

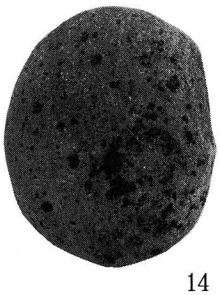
6

7

9

10

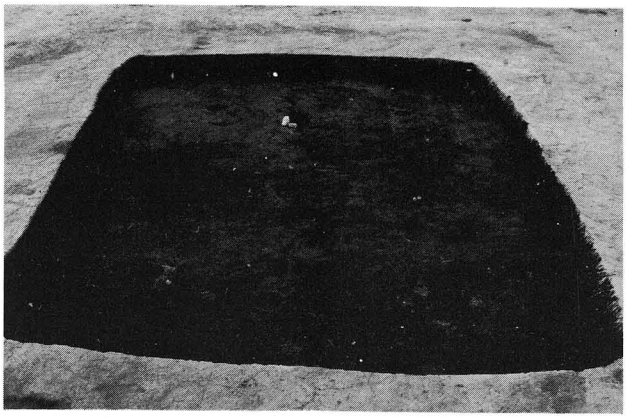
11



14

5号住居址出土遺物

6 号住居址及び出土遺物



1

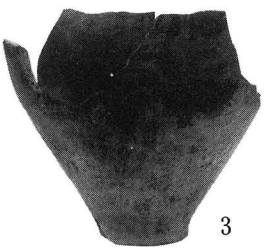
2

3

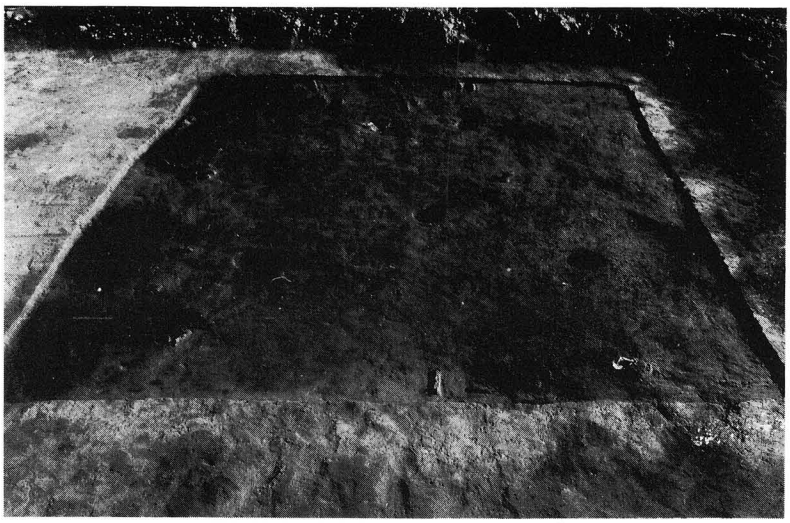
1

炉

7 号住居址
及び出土遺物

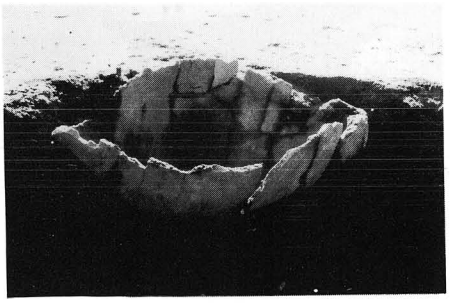


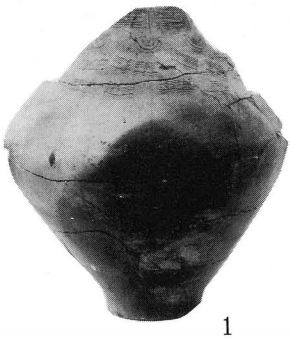
3



10号住居址
及び出土遺物

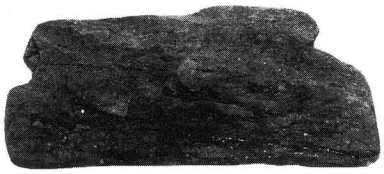
炉



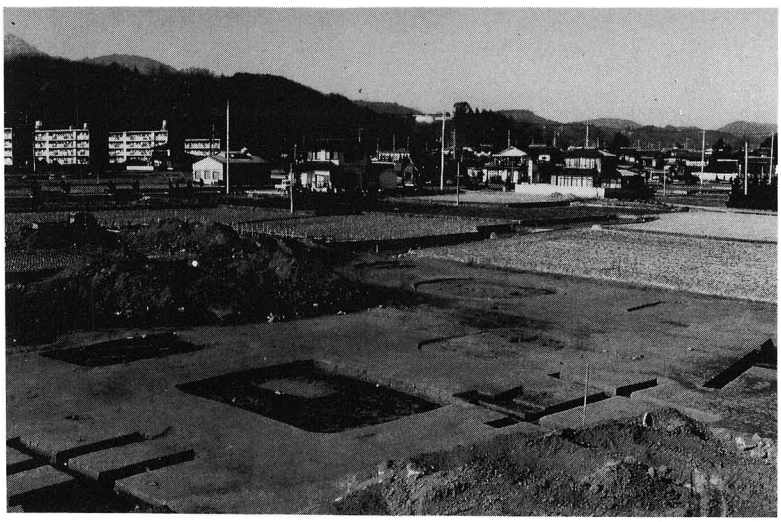


1

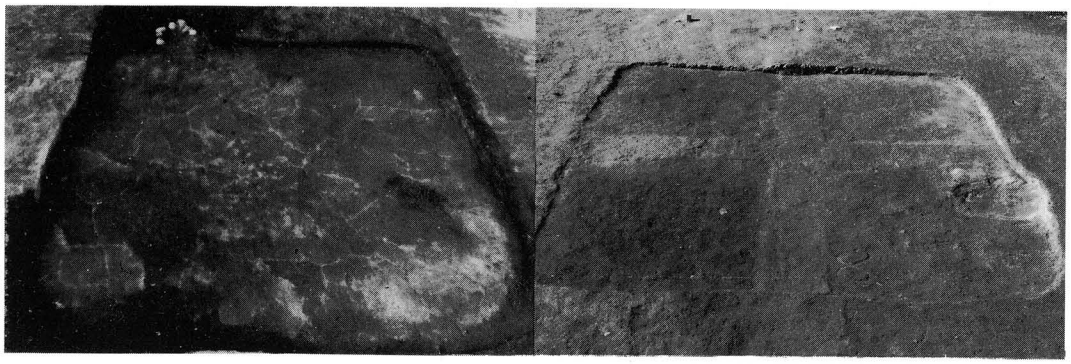
2



4



遺跡近景



8号住居址

9号住居址

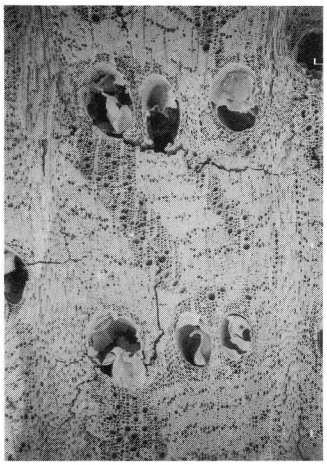
3

4

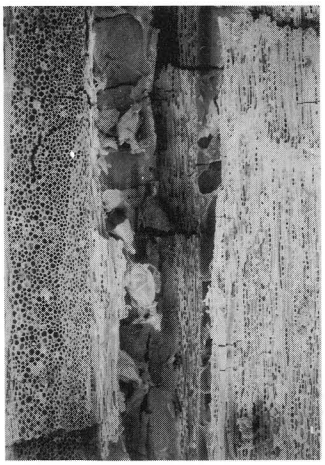
その他の遺物

集 石

発掘調査参加者

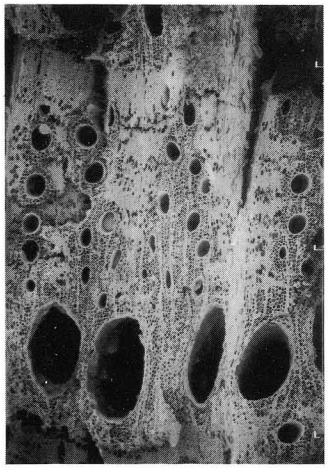


1a. コナラ節 横断面
(bar:1mm)

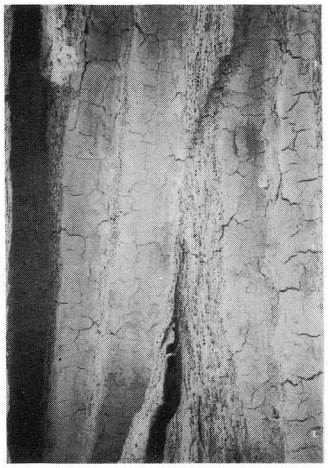


1b. コナラ節 接線断面
(bar:1mm)

1c. コナラ節 放射断面
(bar:1mm)



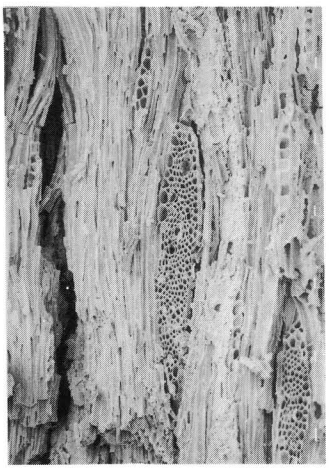
2a. クヌギ節 横断面
(bar:1mm)



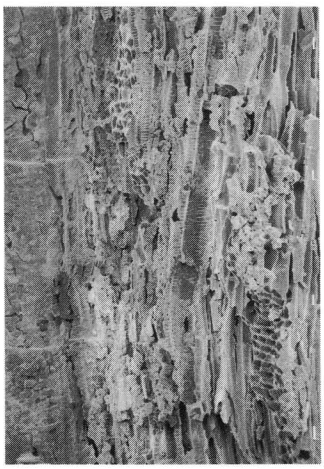
2b. クヌギ節 接線断面
(bar:1mm)

2c. クヌギ節 放射断面
(bar:1mm)

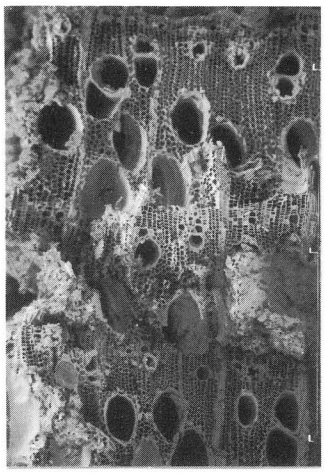
3a. ケヤキ 横断面
(bar:1mm)



3b. ケヤキ 接線断面
(bar:1mm)



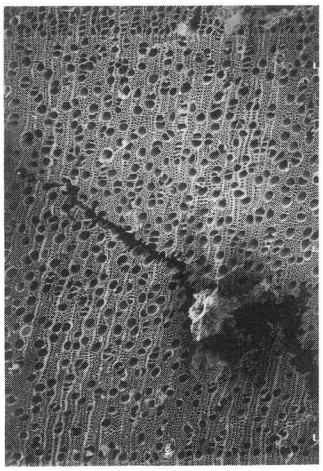
3c. ケヤキ 放射断面
(bar:0.1mm)



4a. 広葉樹　横断面
（bar：1㎜）

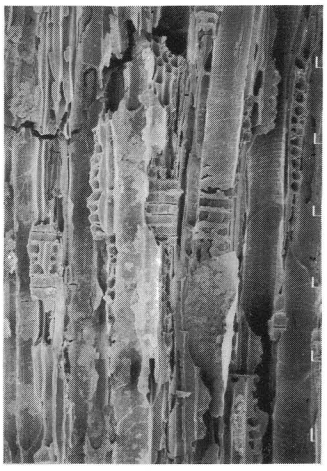
4b. 広葉樹　接線断面
（bar：1㎜）

4c. 広葉樹　放射断面
（bar：1㎜）



5a. ニシキギ属 横断面
（bar：1㎜）

5b. ニシキギ属 接線断面
（bar：0.1㎜）



5c. ニシキギ属 放射断面
（bar：0.1㎜）

下横屋遺跡

―山梨県韮崎市下横屋遺跡発掘調査報告書―

1991年2月28日　発行

発　行　韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会
〒407 山梨県韮崎市水神一丁目3－1
TEL 0551－22－1111(代)

印　刷　アートプリント社